NRI 未来創発
Dream up the future.

NRI 学生小論文コンテスト 2012

日本から未来を提案しよう!

野村総合研究所
Nomura Research Institute

野村総合研究所（NRI）は、企業理念として
「未来創発 ── Dream up the future.」を掲げています。
「創発」とは、多様な才能やアイデアが互いに作用しあい、
新しい価値を生み出し、全体として高まっていくことです。
この「NRI学生小論文コンテスト」は、
次代を担う若い皆さんとともに
未来の社会を創発していこうと、
2006年から行っています。
2012年のコンテストでは、
「自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会」をテーマに
応募者が自分自身のこととして社会をとらえ導き出した、
未来への提案を募りました。
この冊子には、入賞論文をはじめ、
審査の過程や応募者の感想、
コンテストを応援したNRI社員の活動などをまとめています。

NRI学生小論文コンテスト2012

日本から未来を提案しよう！

私たちが考える、
子ども世代に創り伝えたい社会

日本人の美徳を残したい。

偏見や差別がない社会。

あらゆる世代が
豊かさの恩恵を
受けられる社会。

教育立国日本。

多様な価値観があり、
多様な働き方が
できる社会。

安心安全で
あることが第一。

子どもの可能性を
引き出せる社会。

憎しみのない社会。

新しい福祉国家。

日本の美しい里山の
保存と再生を。

日本人としての
アイデンティティを
伝えていく。

何度でも
挑戦できる社会。

子どもたちが
夢や希望を持てる
社会にしたい。

国境を越えても、
わかりあえる社会。

いじめのない社会。

1年間の休暇がとれて、
夢を持ち続けられる
社会。

日本の誇りと文化は
伝えていく。

目次

2 私たちが考える、子ども世代に創り伝えたい社会

6 NRI学生小論文コンテスト2012「日本から未来を提案しよう!」

7 募集要項

8 審査結果

12 コンテストへの想い

13 **入賞論文　大学生の部**

14 大賞 **政経社会系教育重点校「スーパーソーシャルハイスクール」　山本 泰弘**

20 優秀賞 **将来の日本の為に**――我々の世代が為すべき医療改革　**木下 翔太郎**

26 優秀賞 **新しいエコの形、C to Cシェアリングの実現**――「使わない」から「使いたい時だけ」への転換　**藤平 達之**

32 特別審査委員賞 **農業・地域・女性が拓く日本の未来**――つながりから生まれる新しい直売所のかたち　**林 ひろみ**

39 **入賞論文　留学生の部**

40 大賞 **お互いのコミュニケーションのため**――世界の未来である君たちへ　**林 猷琼**

46 優秀賞 **「留学生活用社会」の創造**――外国人留学生就職における問題の解決と留学生自身にできること　**張 辰飛・馬 一丹**

53 **入賞論文　高校生の部**

54 大賞 **エネルギー地産地消型エコシティの創造を目指して　木田 夕菜**

58 優秀賞 **世代間交流による学びコミュニティーの構築　岩間 優**

62 優秀賞 **次世代に残す「里山」**――コウノトリの舞う環境を守る農業の実践をめざして　**谷口 淳人**

66 優秀賞 **今どきの子供が未来を創る**――興味が繋ぐバトン　**舛田 桃香**

70 特別審査委員賞 **自然と仲良く暮らすために**――知ること、考えること、伝えること　**伊藤 茜**

73 **募集告知から審査、そして表彰まで**

74 募集告知

76 審査

78 2次審査会

82 論文発表会

84 表彰式

86 コンテストへの応募動機

90 NRI社員による審査の感想

92 NRI社員のコンテスト告知活動、教員から見た「NRI学生小論文コンテスト」

94 おわりに

95 メディアでの掲載

NRI学生小論文コンテスト2012
「日本から未来を提案しよう!」

野村総合研究所（NRI）は、「未来創発—Dream up the future.」という企業理念のもと、未来社会のパラダイムを洞察し、その実現を担うことを使命としています。そうしたNRIの社会的責任の一環として、これからの社会を担う若い世代の皆さんに、日本や世界の将来に目を向け、自分たちが何をなすべきかを真剣に考え、その熱い想いを発表する場を持っていただこうと、2006年から「NRI学生小論文コンテスト」を開催しています。

今回のコンテストでは学生の皆さんに、自分自身のこととして社会を捉え、それぞれの知識や実体験に基づいたオリジナルな視点から、あるべき社会を考えてほしいとの想いから、「自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会」をテーマとしました。このテーマに合わせ、自分なりに実現したい社会を提案する論文が全国から多数寄せられました。

本冊子では、過去最多となった応募論文1,363本の中から、1次審査、2次審査を経て選出された入賞論文11点を掲載するとともに、選出までの過程をまとめています。

募集要項

新しい社会のために
力強い提案を!

大学生の部 テーマ

自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会

あるべき社会の姿と私たちの挑戦

応募資格：日本の大学院、大学、短大、高等専門学校（4～5年）に在籍している学生で、27歳以下の、個人またはペア。ペアの相手は留学生の部、高校生の部の応募資格者でも可。
字数：4,500～5,000字　＊別途400字程度の要約を添付。
賞：［大賞1名］賞金50万円、［優秀賞若干名］賞金25万円、［佳作若干名］賞金5万円

留学生の部 テーマ

自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会

あるべき社会の姿と私たちの挑戦

応募資格：日本の大学院、大学、短大、高等専門学校（4～5年）、日本語学校に在籍している30歳以下の、留学生の個人またはペア。ペアの相手は留学生の部の応募資格者に限る。
字数：4,500～5,000字　＊別途400字程度の要約を添付。
賞：［大賞1名］賞金50万円、［優秀賞若干名］賞金25万円、［佳作若干名］賞金5万円

高校生の部 テーマ

自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会

私たちがすべきこと、できること、やりたいこと

応募資格：日本の高校、高等専門学校（1～3年）に在籍している、学生の個人またはペア。ペアの相手は高校生の部の応募資格者に限る。
字数：2,500～3,000字　＊別途200字程度の要約を添付。
賞：［大賞1名］賞金30万円、［優秀賞若干名］賞金15万円、［佳作若干名］賞金3万円

※論文は日本語で作成してください。
※論文は自作で未発表のものに限ります。
※テーマをそのまま論文タイトルとせず、独自のタイトルを必ずつけてください。
※3名以上のグループでの応募は審査対象外となります。

審査結果

入賞者の皆さんおめでとうございます！

入賞

大学生の部

大賞
政経社会系教育重点校「スーパーソーシャルハイスクール」
山本 泰弘　京都大学 大学院 地球環境学舎 修士課程２年

優秀賞
将来の日本の為に
――我々の世代が為すべき医療改革
木下 翔太郎　千葉大学 医学部５年

優秀賞
新しいエコの形、C to Cシェアリングの実現
――「使わない」から「使いたい時だけ」への転換
藤平 達之　一橋大学 社会学部４年

特別審査委員賞
農業・地域・女性が拓く日本の未来
――つながりから生まれる新しい直売所のかたち
林 ひろみ　群馬県立女子大学 国際コミュニケーション学部３年

留学生の部

大賞
お互いのコミュニケーションのため
――世界の未来である君たちへ
林 猷琼　武蔵野大学 グローバルコミュニケーション学部１年

優秀賞
「留学生活用社会」の創造
――外国人留学生就職における問題の解決と留学生自身にできること
張 辰飛　東京大学 大学院 経済学研究科 修士課程１年
馬 一丹　東京大学 大学院 工学系研究科 修士課程２年

高校生の部

大賞
エネルギー地産地消型エコシティの創造を目指して
木田 夕菜　鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校１年

優秀賞
世代間交流による学びコミュニティーの構築
岩間 優　桜蔭高等学校３年

優秀賞
次世代に残す「里山」
――コウノトリの舞う環境を守る農業の実践をめざして
谷口 淳人　神奈川県立中央農業高等学校２年

優秀賞
今どきの子供が未来を創る
――興味が繋ぐバトン
舛田 桃香　頌栄女子学院高等学校２年

特別審査委員賞
自然と仲良く暮らすために
――知ること、考えること、伝えること
伊藤 茜　三重県立四日市高等学校２年

佳作

（氏名の五十音順）

大学生の部

多様な価値観に対応する新たな働き方の提案――日本型雇用システムからの転換
足立 達彦　明治大学 政治経済学部３年
長谷川 哲士　明治大学 政治経済学部３年

『科学技術共生成型社会』の提案――東日本大震災を経て、科学技術といかに付き合うか
飯田 貴也　早稲田大学 先進理工学部４年

人類社会の発展に貢献し続ける国「日本」――戦略的思考を持つ国づくり人づくり
池田 貴春　慶應義塾大学 総合政策学部４年

日本の里山保全モデルを世界に発信――広がれ！里山再生の輪
池松 俊哉　筑波大学 大学院 生命環境科学研究科 修士課程２年

世界に誇れる日本の教育を目指して――個性を伸ばす多様な教育システムの構築
乾 瑞紗　神戸薬科大学 薬学部５年

縦のつながりが強い社会をつくる
大泉 友奈　山形大学 人文学部１年

GNPからGWPへ
――東アジアで超国家的枠組みの形成を目指そう！アジアの平和で安定的な共存を見据えて
川﨑 裕紀　名古屋大学 経済学部１年

教育が変える人間性と日本社会
楠木 秀憲　京都大学 経済学部４年

持続性社会へ導く地図――三つの縁と三つの力
戀川 光央　東京理科大学 大学院 イノベーション研究科 修士課程２年

食の安全とトレーサビリティシステム
竹川 友祐　三重大学 人文学部３年

情報社会を生き抜く子どもたちへ
田中 志歩　東京工芸大学 芸術学部４年

自然との共生社会――自然を守り、生活を守る
吉田 圭介　信州大学 繊維学部４年
川口 拓郎　信州大学 繊維学部４年

留学生の部

みんなが夢のために努力できる社会を作るための貧困退治
――現地民を中心とした適正技術的接近法で貧困退治を図る
李 ロウン　千葉大学 工学部 4年

偏見と差別がない国へ――三位一体の小学校教育から真のグローバル社会を構築する
金 升一　慶應義塾大学 法学部 3年

私たちの子ども世代のためにあるべき社会の姿を考える
――「絆」が溢れる社会の実現を目指して
金 桂英　早稲田大学 大学院 日本語教育研究科 博士課程 2年

安心、安全なコミュニティと、持続的に発展する「スマート社会」づくりに向けて
グェン ティ トー ロアン　滋賀大学 経済学部 1年

「包み」文化を受け継ぎ、世界に発信しよう――中国人から見た日本の「包み」文化
周 菲菲　北海道大学 大学院 文学研究科 博士課程 2年

「憎みがない社会」を次世代に創り伝える――日中関係を改善するために提案する
段 皓宇　武蔵野大学 大学院 言語文化研究科 修士課程 2年
祁 文月　武蔵野大学 大学院 言語文化研究科 修士課程 2年

水資源――豊富のままに、最も残すべきもの
呂 攀峰　聖学院大学 政治経済学部 4年

高校生の部

明日に向けて一歩ずつ
新井 冬威　本庄東高等学校 2年

地域の魅力、再発信！――商店街から始まる地域活性化
飯尾 祐介　東海高等学校 1年

この夏、台湾旅行で考えたこと
飯田 純子　帝塚山高等学校 1年

与えることで与えられる――教会で学んだこと
内海 理紗子　清教学園高等学校 2年

わがままを言うこと
岡田 馨絵　東京都立小石川中等教育学校 4年（高校1年相当）

2つの“eco”から見た現代日本
河合 洋弥　宮城県仙台第三高等学校 2年

平和な世界を創り伝えるために――『世界市民連邦』の実現を目指す。
金 尚燁　神戸朝鮮高級学校 3年

You to Me
草間 さゆり　横浜雙葉高等学校 2年

芋きん屋のおばあちゃん
小林 光亮　東京都立小石川中等教育学校 4年（高校1年相当）

教育立国日本の教育理念を次世代にもつなげていく
小松 亜美　立命館慶祥高等学校 3年

いじめのない世の中へ
十文字 千花　埼玉県立川越女子高等学校 1年

アンテナショップの海外進出案
染谷 円花　中央大学高等学校 3年

日本に、自分に誇りを――隣の芝は本当に青い？
高橋 若葉　神戸大学附属中等教育学校 4年（高校1年相当）

高齢者や小さな子ども達、誰もが楽しく暮らせる社会
寺井 沙也加　愛知県立愛知商業高等学校 3年

茶道と心
長野 志保　中央大学高等学校 3年

こ食・朝食
波多江 奈々　福岡県立糸島高等学校 2年

希望ある国家・社会
日野 徹也　帝塚山高等学校 1年

イマを残す
藤本 尚希　山形県立山形東高等学校 1年

ボルネオの熱帯雨林から地球の未来を考える
星野 航輝　西宮市立西宮高等学校 1年

「自分」として生きるために
真下 葵　本庄東高等学校 2年

2030年までに国民の理解は移植される
松木 友香　星美学園高等学校 2年

「しきり」と人類
道盛 裕太　神戸大学附属中等教育学校 4年（高校1年相当）

最高の教育
湯生 晴子　神戸大学附属中等教育学校 4年（高校1年相当）

論文の応募概況

「NRI学生小論文コンテスト2012」には、大学等96校、高校98校から合わせて過去最多となる1,363本の応募がありました。部門別の内訳は、大学生の部に231本、留学生の部に49本、高校生の部に1,083本です。

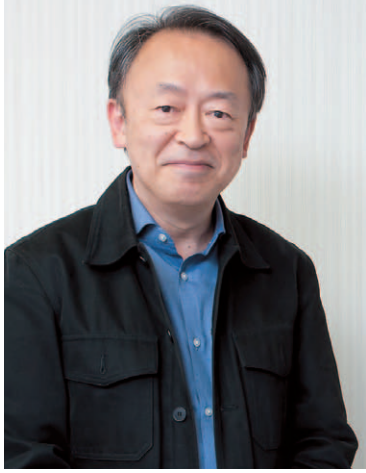
共同で文章をまとめるペア応募は27組ありました。部門別の内訳は、大学生の部に23組、留学生の部に2組、高校生の部に2組です。なかには異なる大学に籍を置く大学生同士による論文や、大学生と高校生とのペアによる論文もありました。

コンテストへの想い

実現に向けた努力が明るい日本を築く

NRI取締役会長
藤沼 彰久

最近の若い人は日本国内に閉じこもる傾向があると感じていましたが、皆さんの元気な応募論文を読んで、杞憂であったと知りました。NRIは「未来創発」という理念のもと、本業を通じて社会に貢献していこうと考えています。会社として行う事業が、巡り巡って明るい未来を切り開くことにつながっていってほしいと思っています。皆さんが論文に込めた想いも、これから実現を目指して努力することで、社会を良い方向に向け、いつか明るい日本を築いてくれる。そんな期待を持ちました。



斬新な発想を知るまたとない機会に

「NRI学生小論文コンテスト」
特別審査委員
ジャーナリスト・東京工業大学教授
池上 彰 さん

NRI学生小論文コンテストには根底に「未来のために何をするか」というテーマがあります。今年は「自分たちの子ども世代に」と具体的な対象を挙げたことで、皆さん自身の問題として、内容の深いオリジナリティあふれる論文が多く楽しめました。私にとっても新しい斬新な発想、知らなかった科学的知見を得る良い機会になっています。私は今回、取材でレバノンに滞在している間に応募論文を読みました。海外という環境で目を通したことで、皆さんの強い想いがとりわけ私の心に響きました。

かつて未来のために作った仕組みを再確認

「NRI学生小論文コンテスト」
特別審査委員
ノンフィクションライター
最相 葉月 さん

かつて日本には、将来のために良かれと思っていろいろな仕組み、施設がつくられました。しかし今回のコンテストで、そこに問題が生じていると若い世代から指摘されました。この国の成長を支えてきたものが危険なものに変わりつつあります。それらを美しく壊す、あるいはより良く再生させるにはどうすればよいのでしょう。「NRI学生小論文コンテスト」の審査に参加することは、その時代の若者たちが持つ多様な問題意識を知る機会になっています。

大学生の部

大学生の部
テーマ

自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会

あるべき社会の姿と私たちの挑戦

私たちには、先人から引き継いだ社会を、自分の子どもたちや後世の人々に、より良い形で伝えていく責任があります。引き継いだ社会を単にそのまま受け渡すのではなく、時代に合わせて改善したり、新しい技術や発想によって抜本的に見直したりしなければなりません。さらに、次世代のために新たな資産を創り出すとともに、発展を阻害するものには適切に対処することも求められるでしょう。私たちは自分たちの子ども世代に、どのような社会を残し伝えていくべきでしょうか。どのような社会を新たに創っていくべきでしょうか。皆さんの知識や実体験に基づいた独自の視点から考察し、その実現に向けて挑戦したいことについて論じてください。

*入賞論文は基本的に原文をそのまま掲載していますが、一部、表記統一などの調整をしています。

大賞 ［大学生の部］

政治経済にかかわる人材の育成が必要、という主張に審査委員も納得。「スーパーソーシャルハイスクール」という独自の提案が高く評価されました。

政経社会系教育重点校「スーパーソーシャルハイスクール」

京都大学 大学院 地球環境学舎 修士課程 2年
山本 泰弘 やまもと やすひろ

1. 原発事故で明らかになったわが国の宿命的課題

近年の日本社会で、深刻な危機感を覚える事象がある。理数工学系の研究成果や人材、教育が尊重される一方、それに対置する「政経社会系」――政治・経済や地政学、コミュニケーション分野――の政策・経営実務や人材への評価、並びに教育の水準があまりにも低いことだ。

東京電力福島第一原発事故、そして今後のエネルギー需給のあり方をめぐる国民的議論は、社会が科学的・技術的知見をいかに扱うかが詰問される契機である。高度な技術・製品・システムを組織がいかにマネジメントするか、行政官が専門家の知見を引いていかなるガバナンスを講じるか、そして何より国民や政治家が、立場や価値観、パラダイムの大きく異なる人々の意見を集約していかなる政策・経済・社会的意思決定を行うか。これらは原発事故・エネルギー問題に限らないわが国の宿命的課題と言って過言ではない。それに真摯に向き合える人間――孤立した異才的存在ではなく、知恵の共有により社会を導く“人々”として――が、まさに必要なのである。単に科学・技術に強い人材を養成することでは打開しえない問いである。

理数教育に特に重点を置く政策がこのまま進展すれば、「特定領域の科学・技術の知見は豊富でも政策や経済活動、社会情勢に対し受け身の人材」の割合が高まっていくことになるのではないか。これはともすれば、政策・経済・社会の方向づけには関わらず、それらにただ従属して働く「意思なきスペシャリスト」を多数にする危険性を含んでいる。

理数系の能力開花を促進すること自体は非常に有益である。それに加え、政経社会系の能力開花を促す施策をとり、輩出人材の均衡をとることが必要なのである。

わが国の人々の間に、社会の仕組みについての基本的認識は確固としたものがあるだろうか。みなが社会の意思決定に無責任であり、何者かから与えられた方向性に従って歩んでいたら、みなが行き詰まり、人々はただ不平不満を言うだけ。このような社会像はあってはならない。民主主義政治に完璧はないという大原則から、現行の政策・経営の仕組みは人々の要求に支えられた意思決定の結果成り立っていること、政府や公共セクターでは血の通った人間が最善の努力をしていることまで、政経社会分野のリテラシーと知的素養を補わなければならない。それであって初めて、われわれ自身に、そして将来世代に誇れる社会としての進路決定ができるのだ。

多くの人が政策・経済・社会について深く考えられる知力を備え、その知を実践する取り組みが世の中のいたるところで見られる、そんな日本社会を将来に創り伝えたいのである。

2.「スーパーソーシャルハイスクール／Super Social Highschool」具体案

そのための初発的施策として、本稿は「スーパーソーシャルハイスクール（本稿ではSSoHと表記）」設定策を提唱する。これは現在文部科学省・（独）科学技術振興機構によって展開されている「スーパーサイエンスハイスクール：SSH（本稿ではSSciHと表記）」制度に範をとり、全国各地に政経社会教育重点校を設定し同分野の能力開発を図るものである。

理数系分野への素質または意欲を持つ生徒は上記制度などにより発展的学習や研究発表の機会を得られるものの、政経社会系分野への素質や意欲を持つ生徒にとってそのような機会は極めて限られている。その格差を補うにとどまらず、政経社会系ならではの学究や実践の可能性を体現する。生きた社会へリアルに迫った教育を目指すのである。

その方針を、以下に挙げる。

① 地理歴史・公民科に重点を置いたカリキュラムの開発と発展的学習

地理歴史・公民は授業教科としてさえ“進学の上で必要性の薄い教科”として軽視されることが多いと思われる[1)]。SSoH指定校においては、地理歴史・公民を他校との差別化を図るための戦略教科と位置づけ、(1)授業内容の充実に始まり、(2)大学の教員・学生や現役社会人、退職者などの協力を得た特別公開講座実施、(3)生徒会・部活動や自主参加のゼミなど課外教育の強化を図る。

(1)については学習塾や予備校との連携で、効率性とおもしろみを両立した授業を追求する余地が多分にあるはずである。これまでの教育内容を超える発展的学習を行う上でも、外部指導者によるノウハウ提供が重要となる。(2)は大学・社会・地域に散在する知的資源を教科教育に関連するテーマのもと結集する――例えば、災害発生時の公共部門の働きについて当事者の経験談を聴く会を開くなど――試みであり、生徒によりリアルな社会の動きを感じさせることはもちろん、多分野・多世代の人々が共同参画する教育が実現するだろう[2)]。(3)は、スポーツや科学で取り組みが盛んである「生徒の能力発揮」について、政経社会分野の道をより明らかに開こうとするものである。部活動と言えば運動部が主流で、文化部の中でも社会問題の考察やローカルビジネスに取り組む活動はごくわずかなのが現状だ。そこを補い、政経社会分野への意欲・関心をうまく引き出す課外活動を実現したい（詳しくは③、④に譲る）。

② 政策・経営・社会的課題の議論と改善策の立案

理数系分野であれば研究成果の発表、応用技術・製品の開発などによって実績が認められるが、政経社会系分野の実績とは、ビジネスや政策の課題について議論・交渉・立案によって解決策を得ることである。

しかし実社会では議論・交渉・立案が頻繁になされるにもかかわらず、それらのノウハウは教育・指導によってではなく社会経験によって身につくものとされている。その実情を改めるべく、SSoHにおいては（外部指導者の派遣を受け）二段階の議論・交渉トレーニングを行う。

基礎段階として、議論・交渉の技能を身につけること。ディベートや交渉ゲームなどにより、論理的な立論・反論、そのための情報収集、相手との取引・互恵・痛み分けによる交渉妥結をノウハウに従って実践する。議論・交渉の技能を習得したら、応用段階として現実の政策課題やビジネスを題材に解決策の導出を試みる。ロールプレイにより国際会議における合意形成を目指す「模擬国連」がメジャーだが、同様に国や地域の政策をめぐるロールプレイや、ステイクホルダーをプレイヤーとしたビジネスプランの考案という課題も考えられる。議論・交渉の手段を用いて解

決策にたどり着く経験を、生徒に持たせるのである。

この技能をもって、政策・ビジネスプランコンテストに活躍の場を求めたり、実社会の課題にアプローチしたりすることを後押ししたい。さらに、SSciHには指定校が一堂に会して研究発表を行う機会があるが、そのSSoH版を設け、各校が政策・ビジネス案や、校内・地域の課題解決の成果を発表し競い合う機会とする。

③ 高度な生徒会活動

生徒会活動にも、SSoHの特色を出す余地は大いにある。生徒社会の予算配分や役割分担、行事運営、対外的な社会貢献活動などに関わる生徒会は、組織運営や行政実務の体験ができる場である。多くの学校で存在感が薄いのが現状と思われるが、SSoHでは生徒会活動の充実を目指す。社会貢献・地域活動で生徒会が特色を発揮する例を取り上げて推奨するとともに、生徒が学校の運営に関わる取り組みも振興したい。

学校は、教員や事務員が一方的にサービスを提供し、生徒や保護者はその顧客、というあり方に傾きつつある。それを、生徒会活動を通して生徒も学校運営に携わるあり方を目標とする。それにより、小さなものでも社会の仕組みを動かす苦労がなされていることを生徒に実感させ、また生徒という立場でも学校または地域という小社会をよくすることができるとの経験を持たせたい。

例えば、学校運営についてのフィードバック収集や、資源管理（省エネ・3R）、情報発信、地域連携など学校の抱える課題で生徒のコミットメントを活かせるものは多岐にわたる。それらに生徒会・委員会として多くの生徒が分担して関わり、生徒と教員・事務員との協働が定着した学校像を目指す。さらに、学校内外での活動を円滑にするように、地域コーディネーターとなる人を介在させるとよい。

取り組みを単なるボランティアや事務手伝いで済ませることなく、有意義で明確な課題設定のもと、活動の過程や工夫を記録し、報告書やスライド・ポスターの形で外部発表してフィードバックを得ることまでたどり着かねばならない。それにより実際の課題を解決するプロセスを「知」として形式化する経験を得るのである。

④ 部活動・課外ゼミ

身近な課題に取り組む活動を③と同様に促進するのに加え、社会・国際問題、ナショナル・グローバルビジネス、地政学などの探求を行う部活動や課外ゼミを支援する。手段としては大学教員や実務家など有識者の訪問、公共図書館を介した資料取り寄せなどを費用助成することが挙げられる。これはSSciHの課題研究促進に相当し、これにより身近な世界にはない問題やパラダイムをとらえ、情報収集、立論と検証、結論報告を

経て、社会科学的研究手法の演習となる。

それは研究者としてのスキルを養成することのみならず、むしろ市民・社会人として備えるべき情報リテラシーや論理的思考力を強固にすることの効果が大きい。冒頭で述べたように刹那的論調が跋扈する現代、人気があるだけの言説に身を委ねる大衆とならないためには、この能力・感覚が必須である。

3. 実現のあり方

以上の各方針とその内容は、現実的には1校ですべてができるものでも、また仕組みを押しつけて実行するものでもない。モデルやシナリオ、既存のグッドプラクティスを対象校に示し、各校が自律的に沿うべきモデルを設定し、地域特性や活用できる資源に応じ自校流にアレンジして成果を出していくことを促したい。各校の取り組みを発表し合う機会があれば、そこから新たなシナリオやグッドプラクティスが見出され、それが広がることにより政経社会系教育の水準が向上していくことになるだろう。

本案の実行上の強みは、SSciH施策に比べ政策コストがかなり低く抑えられることと考える。SSciHでは指定各校が高価な実験器具を購入するなど“モノ”に結びつく費用が大きいようであるが、SSoHで想定されるプログラムは“モノ”を必要とする度合いは極めて小さく、地域の社会人や企業、NPO、退職者などに指導者または“教材”として教育に参画してもらう、いわば“人”の調達がカギとなる。限られたコストで、グッドプラクティスを参考とし、または蓄積しつつ、地域の人々のコミットメントを得て教育の質を高めていく――知識情報集約型で地域資源活用型の、現代からの時代に適合した施策のあり方と言える。

そもそもこれは政府の施策を待つ必要はない。地域の経済団体や有志企業、PTA、大学など有志連携による実験的取り組みがいち早く可能である。「新しい公共」の実践として真っ先に着手すべき課題ではないだろうか。

4. 結び

今、政治経済情勢の閉塞感から、それを打開する人物を育成しようとする「政治塾」・「リーダー塾」が一部で関心を持たれている。有力政治家・経済人による主宰で、政策や経営はもちろん弁論や哲学・思想・歴史への理解も深め、政治経済のリーダーを輩出しようとする取り組みである。

それらはなぜ、大人が対象なのか。政経社会分野軽視の学校生活を送ってきた大人たちが、政治・経済・社会の仕組み上の課題に向き合うにあたり、今になってそれに気づき真摯になっているように見える。とりあえず現行の仕組みを疑うことなく社会を経験した

上で、改めて社会の仕組みについて学び始めることで対応できる時代ではない。現代と近未来とを鋭く知覚し、社会のあり方を絶えず更新していける人材を学校教育から輩出していくべきである。そのためには政経社会系教育を振興し、自らの生きる社会の仕組みをとらえ、それを自らアレンジする発想を若者に持たせる必要がある。その嚆矢となるのが、「スーパーソーシャルハイスクール」施策なのである。

文中注

1) 2006年に全国的に発覚した「高校における必修科目未履修問題」がそのことを表している。
2006年の文部科学省による調査において、未履修が判明した延べ1,095件のうち、地理歴史は460件、公民は106件で合わせて全体の51.7%を占める。
・文部科学省「高等学校等における未履修の状況について」、2006年12月22日
（初等中等教育分科会（第45回）・教育課程部会（第49回）合同会議　配付資料）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/07013003/002/002.pdf
・「高校の未履修問題」『四国新聞』（四国新聞社、2006年11月5日付朝刊）
http://www.shikoku-np.co.jp/feature/tuiseki/360/
2001年に広島県の高校で発覚した必修科目未履修問題では、理科の未履修が2件、数学は0件であったのに対し地理歴史は12件、公民は3件であった。
・広島県教育委員会「県立高等学校における必履修科目の未履修問題」、2001年9月14日
http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/06senior-2nd-mirisyu.html

2) 公開講座として地域住民にも受講の機会をもたらすことが望まれる。また、この機会を媒介として産学官民が関わり合う地域のソーシャルキャピタルが形成されることも期待できる。

参考文献

・独立行政法人 科学技術振興機構「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」
https://ssh.jst.go.jp/
・文部科学省「高等学校等における未履修の状況について」、2006年12月22日（初等中等教育分科会（第45回）・教育課程部会（第49回）合同会議　配付資料）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/07013003/002/002.pdf
・「高校の未履修問題」『四国新聞』（四国新聞社、2006年11月5日付朝刊）
http://www.shikoku-np.co.jp/feature/tuiseki/360/
・広島県教育委員会「県立高等学校における必履修科目の未履修問題」、2001年9月14日
http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/06senior-2nd-mirisyu.html
・リセマム「スーパーサイエンスハイスクール生徒研究発表会…広島国泰寺高校など37校が受賞」、2012年8月10日
http://resemom.jp/article/2012/08/10/9220.html
・Chem-Station「未来の科学者を育てる政策～スーパーサイエンスハイスクール（SSH）～」『化学者のつぶやき』、2012年7月11日
http://www.chem-station.com/blog/2012/07/ssh.html

※ウェブサイトは2012年9月17日最終閲覧

優秀賞 ［大学生の部］

医学生の立場から、出産にまつわる日本人の慣習、医療制度などへの疑問を提示。少子化や子育てへの現実的な提案が審査委員の共感を得ました。

将来の日本の為に
―― 我々の世代が為すべき医療改革

千葉大学 医学部 5年
木下 翔太郎 きのした しょうたろう

はじめに

我々の世代が将来の日本に残せる物は何か、10年、20年先の未来で問題となっている事は何かという事を考えていく中で、重要なキーワードとして挙がるのが少子化問題である。平成元年の「1.57ショック」以降、少子化という問題が大きく浮上し、様々な対策が考慮されてきたが、大きく効果を発揮した物は無く、今尚出生率は漸減を続けている[1)]。今後はますます問題意識が上がり、対策も議論されていく事と思われるが、仮に有効な対策が為されたとしても、効果が出てくるのは出生率が回復した後の世代が成長してからなので、遠い先の話である。当面は少子化を受け入れ、少子化とうまく付き合っていく社会づくりが必要となるだろう。

少子化社会では子供は貴重な存在であり、子供を産み育てる母親と併せて社会全体がサポートしていく事が求められる。しかし、医療の世界に目を向けると、「小児科」「産婦人科・産科」を有する医療機関は17年連続で減少しており、各地で小児科産科の不足が問題となっている[2)]。出産に携わる産科や子供の医療を担当する小児科といった科は、少子化社会では、今まで以上に充実していなければならない筈であるのに、こうした現状のまま、更なる少子化が進む未来世

代に世代交代を行うのは、あまりにも酷である。それどころか、小児科や産科のような出産から子育てをサポートする医療体制が充実していない事は、子供を産む事への不安に繋がり、少子化を加速させる要因になりかねない。これでは少子化からの脱却はおろか現状維持もままならなくなってしまう。これは早急に改善されるべき問題である。

よって本稿では、未来世代の為にできる事の一つとして、小児科・産科医療体制の充実を掲げ、その為の方策について提言する。また、先進国で広がりつつある出産を担う女性の負担を軽減する医療についても紹介し、導入の為の提言を行う。

第1章
小児科・産科医療の現状

小児科や産科の領域は、原因不明の死亡や突然死が多いといったリスクが大きい点が他の科と異なっている。例えば、「乳幼児突然死症候群」と呼ばれる疾患は、元気だった乳児が何の前触れもなく突然死してしまうもので、1歳未満の乳児の死亡原因の第3位[1)]となっているが、原因は未だ解明されておらず、現代医学を修めた医者にも対応しようがない。また、産科でも、「羊水塞栓症」と呼ばれる疾患があり、我が国の妊産婦死因の30%を占めているが、原因の解明や治療法は確立されていない[3)]。古来より、お産や子供の病気というのは死に繋がる事が多く、そのリスクは現代でも決して無くなった訳ではないのだが、その点について一般の理解を得られているとは言い難い。平成16年の福島県立大野病院であった妊産婦死亡も、最終的に医者はその時にできた最善の事をしていた事が認められて裁判では無罪となったとはいえ、検察やマスコミによって産婦人科医が犯罪者扱いされた事は医療界に大きな衝撃を与え、新卒の医師の産婦人科離れを加速させてしまった事は否定できない。また、現場においても、患者の容体が急変しやすい事に加え、小児科ではモンスターペアレントの問題や、産科では昼夜を問わず緊急のお産が入る事による拘束時間の長さといった問題があり、他の診療科と仕事として比較する目で見た時に、どうしてもリスクや忙しさが目についてしまう。

近年は、就職難の煽りを受けてか医学部の入試は難化傾向にあり、受験で苦労した分医学生にとって将来のリスク回避への思いは強く、給料や勤務条件がいい科であるとか、交通の不便な地方より都心部に人が集まる傾向にある。しかし、これは制度変更によって各人が好きな病院で研修する事が可能になった事、各人が自らの利益となる事を選択する経済的な主体である事を考えると、責めるべき事ではなく、寧ろ制度や体制が招いた結果と考えるのが妥当と思われる。

第2章
小児科・産科医師を増やす為に

医学部における医師養成費用は高額であるにもかかわらず、国公立大学医学部が他の学部と同程度の学費に抑えている事や、近年厚生労働省が医師不足の声に応える形で医学部の定員を増員している事からも、国が医療を社会インフラとして捉えている事は明らかであり、その整備の主体は民間ではなく国なのである。なればこそ、医師の偏在や、小児科や産科からの医師離れに対しては、社会インフラを整備する責務を有する国が、ある程度強制力を持った対策を打ち出す必要がある。

医学界等で対策として頻繁に耳にするのは診療報酬の増額である。確かに、給料という面での待遇改善は、志望者を増やす要因となり得るかもしれない。しかし、上述のように、リスク回避の視点が強い今の世代は、給料だけでなく、リスクが低い事や勤務条件の善し悪し等も判断材料として大きくなっているので、恒常的に確保する為の条件としては弱いと思われる。それよりも強制力があり、恒常的な対策となり得るのが、「小児科・産科等の不足科の志望者に対する入学定員枠」の設立・増加と、「小児科・産科志望者への奨学金」制度の充実である。前者と似たような形として、いくつかの国公立大学等で、卒業後に県内で働く事を前提とした「地域枠」が設けられているが、その応用版とも言える。受験競争が激しく、医者志望者が増えている中で、そうした不足科の志望者も少なからずいる筈であり、不足科の医師になってもらう見返りとして入試での優遇を行うという事で地域枠と同様の効果が得られると思われる。また、後者は、国や自治体などが「特定の地域・科で将来働く事」を条件に学費・生活費等の奨学金を出す事で、既に東京都等で同様の制度が始まっており[4)]、こうした制度を全国的に展開・拡充していく事で、地域医療の下支えや不足科の医師の充足をある程度の確実性をもって行えるものと思われる。こうした制度は一旦確立する事で、他の科が足りなくなってきた時にも応用でき、早い対応が可能である事も有効であると考える。

第3章
産科医療の改善

また、産婦人科においては、一般の方々へのリスクの理解を広める事も有効であると思われる。例えば、高齢出産になればなるほど、子供が障害を有する確率や流産の危険性が高まる事、妊婦の妊娠高血圧症等の発症率も年齢に応じて上昇して、母体リスクも上昇する事等を広く周知し、子供が欲しい場

合、できるだけ若いうちに産む事を間接的に奨励する事がこれにあたる。人々の生活に干渉し、子供は若いうちに産むように強制する事はできないが、そうした知識を踏まえる事で早く産もうと考える人も出てくる可能性はあり、また、初産年齢が下がる事で、第二子という選択肢も広がり、ひいては少子化対策の一助ともなり得るので、リスクの周知は重要である。

その他、産婦人科では妊婦健診に行く事で、胎児の異常や胎盤の異常を早期に発見する事ができ、結果として母体と子供の両者のリスクを下げる事に繋げられるので、健診を奨励するという事もある。何らかのリスクがある事を早く発見できれば、対応可能な病院へ早期に紹介受診できるなど妊婦側も安心して出産に臨める上、医療側も健診を通してハイリスクな人とローリスクな人を判別する事でその後のフォロー等において適切に対処できるという事があるので、妊婦側にとっても医療者にとってもメリットが大きく、健診受診率は100%を目指すべきである。しかし、地域や病院によっては健診費用の自己負担分が生じる事等から受診率は十分ではなく、例えば大阪市では平成21年度の8回受診率は64.6%となっている[5)]。こうした状況を改善する為の策として、妊婦健診の一定回数までの自己負担を無くし、健診を奨励する事が挙げられる。現在も自治体によって補助金を設けている場合等もあるが、地域差を無くすために、国が全国的に進めていく事が望ましいだろう。

第4章
新しいお産と産後ケア

近年、硬膜外麻酔を利用した無痛分娩が先進国で普及しており、アメリカで6割、イギリスで3割、保険が適用されるフランスでは8割の分娩が無痛分娩で行われている[6)]。硬膜外麻酔による分娩の効用は従来のお産の苦しみからの解放に留まらず、筋肉の弛緩による出産時間の短縮にも効果がある。加えて、出産時の苦痛を抑える事で体力の消耗を防ぎ、産後の回復も早くなると言われており、そうした母体保護の観点からも推奨する産婦人科医は多い[6)]。

上記のように非常にメリットの多い無痛分娩であるが、日本での普及は、保険の適用外である事や価値観の問題等から全出産のわずか2.6%に留まっている[6)]。必ずしも無痛分娩でなければいけないという訳ではないが、先進国の人々で顕著な体力の低下や、高齢出産が増えている事を考慮すると、女性の負担を軽減する無痛分娩は産後の健康を考える上で、非常に有意義である。また、出産をした事がない女性の出産への恐怖を取り除く事や、既に出産を経験した女性に次の出産を意識させるきっかけとなる事も考えられる

ので、少子化対策としても捉える事ができる。是非とも保険の適用をすすめ、希望する人が受けられるように普及を進めていくべきである。

また、フランスでは産後の骨盤底筋体操も保険適用され、助産師や運動療法士による訓練が無料で受けられる[7]。この骨盤底筋体操は、「ケーゲル体操」という名でも知られており、日本でも各所で紹介や推奨がされているが、保険適用でない事や、独力でやろうとしても達成度の評価等が一般人には易しくない為、あまり認知度は高くない。この体操は、妊娠出産によって緊張を失った骨盤底の筋肉群を鍛えなおす物で、効果として、産後の女性や中高年の女性に多い尿失禁や子宮脱に対する予防となる為、生涯を通じた女性の健康づくりへの支援と繋がる。また、パートナーとの性生活再開の支援になる事も主張されており[7]、夫婦間のセックスレス等の改善にも効果があるとみられている。特に、夫婦間のセックスレスの原因として「出産後なんとなく」が20.9%で原因として最多である事等が問題視されている我が国でも[8]、この問題に対する対策となる可能性のある物であれば導入を図り効果を評価する事は有意義であろう。

このように、硬膜外麻酔や骨盤底筋体操を保険適用という形で推奨する事で国民の健康増進のみならず、生活の豊かさを向上させる事ができる可能性がある。また、お産に対する抵抗を取り除く事や、夫婦のセックスレス解消は少子化対策にも繋がる可能性があるので、積極的に推奨していくべきである。

おわりに

本稿では、来るべき少子化時代に向けての準備として、医療の分野における提言を行った。医療に関する問題というのは、外側から見えにくく、医療関係者が声を上げていくしかないのだが、臨床の現場は忙しく、なかなかそこまで手が回る人が少ないのが現状である。自分は医学部に通い、医療の世界に片足を踏み入れている存在であり、そうした問題に意識を向け、外に発信できる人間となる事を目標として本業の医学の合間に勉強してきたが、今回本稿に纏める過程の中で自分も未だ勉強不足である事に気が付けた。今後も研鑽を積んでいきたい。本稿を手掛けるきっかけを作って下さった野村総合研究所の方々、並びに審査員の方々にはこの場を借りて御礼を申し上げたい。

参考文献

1) 厚生労働省「人口動態調査」
http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1a.html
2) 厚生労働省「平成22(2010)年医療施設(動態)調査・病院報告」
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/

iryosd/10/dl/shisetsu.pdf
3) 池田智明「母体安全への提言2011」Vol.2
http://shusanki.org/keywordlist.html?theme_id=184&key=11
4) 東京都福祉保健局「「東京都地域医療医師奨学金（特別貸与奨学金）のご案内」について」
http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/iryo/shikaku/ishishougaku/index.html
5) 大阪市「大阪市 妊婦健康診査実施状況」
http://www.city.osaka.lg.jp/kodomo/cmsfiles/contents/0000116/116003/3-2.pdf
6) スミスメディカル・ジャパン（株）「CADD NEWS 2011 summer 」
http://www.smiths-medical.com/Userfiles/jp/CADD/CADDNEWS_2011summer_11.pdf
7) 齋藤益子、宮本郁子、大澤豊子「フランスの妊娠出産と少子化対策」『保健師ジャーナル』Vol.66 No.05、2010年
8) 北村邦夫「第5回男女の生活と意識に関する調査2010」
http://nk.jiho.jp/servlet/nk/release/pdf/1226502324050

※ウェブサイトは2012年9月15日最終閲覧

優秀賞 ［大学生の部］

「所有」から「利用」へという、すぐにでも実現できそうなC to Cシェアリングというアイデアに、時代の閉塞感を打ち破る可能性が感じられました。

新しいエコの形、C to Cシェアリングの実現

――「使わない」から「使いたい時だけ」への転換

一橋大学 社会学部 4年
藤平 達之 とうへい たつゆき

1. 問題意識

「エコ」という言葉を聞くと、何が浮かぶだろうか。一般的に「エコ」とは「環境にいい○○」を意味する言葉で（例えば、有名なものにはエコバッグが挙げられる）、我々が「エコ」と言う際、その活動の多くは、何かの節約や保全、我慢などであることが多いように感じる。要は「あるものを減らす、もしくは使わない」という考え方を軸とする行為だ。

ただ、この―いわば、「我慢」を強いられる―エコ意識や活動に限界が見えているのも事実である。例えば以下のアンケートのデータが、部分的にではあるがそれを示していると言える。パナソニックが2012年に行った「節電に関する意識調査」に拠れば、「昨夏の節電生活には、ストレスを感じていた」と答えた人は全体の34.4%である。また、「できるだけ、ストレスなく節電したい」と答えた人は、94.6%にも上った。私自身も、特に震災を機とした節電活動には、根拠のない強迫観念を感じているのが事実であるし、日常生活においても実態をつかめない「エコ」という言葉に踊らされている感は否めない。そしてそれがストレスになっていない、と言えば嘘になるだろう。

このままの方向性での消費、節電などの「エコ」活動には限界があるのではないか、と

いうのが私のかねての問題意識であり、実感である。もっと無駄のない、かつ無理のない形があるのではないだろうか。「常にある／ありすぎるものを使わない」エコではなく、「欲しいものを欲しい時にだけ使う」エコという発想の転換が必要である。そこで、今回は「消費」という観点から、この問題を考えていきたい。

2.現状分析と方向性

2-1.若者の消費意欲

話を「消費」に移すと、我々若者の消費意欲、所有欲の減少が騒がれて久しい。手塚豊の「若者論再考―「いまどきのヤツは」を超えて―」(2012)に拠れば、2007年の日経MJ「MJ若者調査」を契機として、「若者の所有欲自体が減少しているという不思議な現象」が、メディアに取り上げられ始めたのだという。そしてその後、「所有欲の減少」は、1つの潮流として認知・定説化されていく。本論文は、若者は、「買う」から「使う」へその消費形態を変えていっている、と結論づける。すなわち、「買う≠所有する」という図式を、若者は自身の中で成り立たせている、ということだ。これをネガティブな方向に結論づける人も数多いが、私はこれを新しい「エコ」として捉えることができるのではないかと考えている。

従来のエコは「我慢」であった。私がこれから提案したいエコは「無駄のない利用」である。「欲しい時に欲しいものを」という発想で生活をしていくことは、今後の社会をよりよくしていく一歩になると考える。

2-2.シェアリングサービスの実態

若者の「買う」から「使う」へというパラダイムシフトを受け、注目したいのが「シェアリング」「リーシング」といったビジネスモデルである。TSUTAYAなどに代表されるレンタルCD店やビデオ店はもちろん、NTTドコモが挑戦している自転車のシェアリング、都心で徐々に認知されつつあるタイムズ(駐車場サービス)のカーシェアリング、子供服のシェアリングなど、製品・サービスへの応用性は幅広い。

さて、リサ・ガンスキーは著作『メッシュ』で、共有ビジネスが活気づく背景として、以下を挙げている(筆者が再構成)。

①長引く経済危機・社会危機により、自分にとって価値があるもの、重要なものを再考・再評価する機会を得たこと
②環境変化がビジネスコストの高騰を招き、「過剰生産⇔過剰消費」モデルの限界が露呈したこと
③情報ネットワークが成熟し、個人がベストタイミングでベストな商品・サービスを利用できる環境が整ったこと

震災以前に述べられた理論であるが、①

―③の条件は、現在でもなお、その妥当性は高いように感じる。①に関しては、震災による価値観の変化、②は不況によるビジネスモデルの変化、③はソーシャルネットワークの台頭。つまり、この段階で「シェアリング」に関わる提案をすることは、ある程度時代性に沿っており、妥当であると考えられる。

一方、私が考える既存のシェアリングサービスの問題点を以下に列挙したい。

①B to Cのサービス（ビジネスとして成立させることを第一義としたサービス）がほとんどで、C to Cでのシェアリングが盛んでないこと

②商品・サービスの種類が豊富でなく、また各々のプラットフォームがバラバラで、俯瞰しにくく使いにくいこと

③ネット（特にソーシャルメディア）の利用が不可欠で、ユーザーが限られること

④「ちょっと使いたい」という気軽なニーズには対応しにくく、また安心感・信頼感も不十分であること

上記が問題であると考える。では、シェアリングの概念を取り入れながら、本コンテストのテーマに掲げられた「生活を楽しく豊かなものにする」「よりよい社会を作る」ためには、どのようなアイデアが必要なのだろうか。

3.C to Cシェアリングの実現

結論から述べると、今必要なのは巨大な「C to Cのシェアリングプラットフォーム」の実現である。「誰のものでもない（運営会社のものである）商品」を不特定多数がシェアするのではなく、「私の／あなたの」商品・サービスを気軽に利用し合える環境の整備こそが必須であると考えている。

3-1.具体的モデルの概要

イメージは地域ごとに特化した電話帳のような存在（紙媒体、ウェブの双方で展開）である。個人の名前、貸し出せる物品、連絡先（電話番号でもTwitterアカウントでも、FacebookのアドレスでもOK）がリスト化されて記載されており、ユーザーはいつでもそれを利用し、検索し、連絡し、シェアリングを成立させられる。

さて、これ以降はウェブのプラットフォームに限定して、話を展開する。このサービスは、地域検索や商品検索、即時検索など様々なニーズに対応していく（楽天トラベルやアマゾンのようなプラットフォームを目指す）。シェアリングの料金や期間のスタンダードは運営母体で設定するが、個別ケースにおける価格や期間交渉もネット上で行えるように、システムを整える。

マネタイズは、ビジネスを主眼としたサー

ビスではないので、月額の登録料を想定しており、それぞれのシェアリングに関してマージンを取るモデルではない。

3-2.ロードマップ

3-2-1.シェアリングのプラットフォーム

3-1.で述べたモデルが、全体の第一段階になり、またサービスの核となり続けるものである。知人同士はもちろん、近くにいる知らない人とも簡単に物品を貸し借りできる環境を整えることが第一義だ。

3-2-2.共同購入のプラットフォーム

ある程度の認知や関心を獲得したら、購入支援（マイクロパトロンのような制度）を行えるサービスも展開したい。すなわち、複数人が出資して1つの商品・サービスを購入し、シェアする、という考え方だ。今存在する商品・サービスを無駄なく利用することはもちろん、購入のフェーズにおいてもリスク（出資）を分散することで、より活発な消費活動が行われることを期待できる。毎年購入者が減少している車や、一人ではなかなか購入する気が起きないウイスキーボトルなどが、商品例として挙げられる。場合によっては、そういった商品を扱う企業や店舗とタイアップして行えるかもしれない。

フラッシュマーケティングのように、同じサービスを大勢で購入し、個別に利用するのではなく、あくまでも同じ商品やサービス（例えば車）を複数人で利用することを想定する。

3-2-3.シェアリング向けの商品・サービス開発

最終目標はコンパクトで無駄のない社会を作っていくことである。これはレンタルやリーシングビジネスを始めるということではなく、【もともと複数人での購入・使用を前提とした商品やサービス】を開発する、ということだ。商品開発の段階では企業も巻き込んでいき、最終的にはそういった商品の存在が普通であるようになっていってほしい。結果、目指すゴールは、個人個人の持ち物が最低限に減り、商品の質が向上し、それらを気軽にシェアし合える環境が整うことだ。

4.そのために私たちが挑戦できること

このプランは壮大で、個人の努力でそう簡単にどうにかできる問題ではないために、私たちが努力できること、挑戦できることはそこまで多くないかもしれない。しかし、日常の積み重ねが少しずつではあるが、状況を変えていくのではないか。

まず挙げられるのは、消費意識の改革だ。手軽にものを買わない、実際に吟味する、友人・知人と手間や商品をシェアする習慣をつけること、などを始める必要があるだろう。

また、私も実際に大学内では、友人・知

人とウェブを用いて、テキストや講義の情報などのシェアを行っているが、（かつてのFacebookがそうであったように）そういったコミュニティからスタートアップして、徐々に範囲を拡大していくことを、在学中に行えたら、と思う。

また、至極個人的な話であるが、私は来春から広告代理店に勤務する。代理店勤務を決めた理由の1つに、ビジネスの全体像を俯瞰し、いつかは事業家としてシェアリングサービスを立ち上げたいというものがある。そのためにも、企業と生活者の（広告）コミュニケーションを学ぶとともに、徹底的な生活者観察で、生活者の消費習慣に対するインサイトを得たい。

5. 期待できる効果とまとめ

非常に壮大なプランであるが、実現した際には我々の消費スタイルを大きく変える、冒頭で述べたように革命的な「エコ」の形になると認識している。「必要な時に必要なものを」という考え方に基づけば、熾烈な価格競争も、モノ余りもなくなるだろうし、何より我々の生活も豊かになるはずである。支出も効率的になるだろうし、周囲の人々との交流も活発になるのではないか。

それ以外にも期待できる効果は多々あるが、主に生産－消費活動の観点から特筆すべきものを挙げておきたい。

①消費が活発に行われること

自分一人では買わなかった、もしくは買えなかった商品に手が届くようになることで、我々の消費活動は盛んになると考えられる。また企業側も従来の広告コミュニケーションではなく、シェアを前提とした新しい広告コミュニケーションが必要となるので、消費市場は活気づくだろう。

②コモディティ化した商品の淘汰

これまでと違って商品は明確な差別化が求められる。「なんとなく買う」という行動は減っていくだろう。複数人で購入するとしたら、商品の吟味は必須であろうし、一人で買うとしたらなおさらである。差別化も難しい商品が世間に多くあふれるような現状は変わっていくと考えられる。

自分の所有物がなくなるということは一見すると質素であるが、私はこれこそが生活を豊かにすることだと考える。前出のガンスキーが「地球は最大の共有プラットフォーム」であると述べているように、シェアリングとは、便利に生きるためには昔からもごく当たり前のことかもしれない。

少し歴史を見てみると、シェアとは、古くは室町時代の「もやい」（原義は労力の貸し借り）に端を発しているように感じる。その後、様々な条件が重なって「個人主義」が進展し

たが、近年のソーシャルネットワークの台頭によって、再び「ネオ・もやい」などとも言うべき風潮が現れているように感じる。佐藤尚之がテレビ視聴をソーシャルメディアで共有する行為を「ネオお茶の間」を名づけたことを参考にした命名だが、こういったウェブ上における共有行為によって、我々は以前よりも友人を筆頭にした周囲との絆を深めているとは言えないだろうか。

この風潮を受け、C to Cシェアリングサービスはきっと流行し、あるべき形として認められていくはずだ。来春から始まる長い社会人生活の中で、絶対に私の手で実現させていきたい。

参考文献

・佐藤尚之『明日の広告』アスキー、2008年
・佐藤尚之『明日のコミュニケーション』アスキー・メディアワークス、2011年
・リサ・ガンスキー（実川元子訳）『メッシュ』徳間書店、2011年
・手塚豊「若者論再考―「いまどきのヤツは」を超えて―」『季刊マーケティングジャーナル』第124号、2012年
・パナソニック「節電白書」http://panasonic.jp/econavi/whitepaper/（2012年9月15日最終閲覧）

特別審査委員賞 ［大学生の部］

農産物直売所での世代間交流や消費者と生産者との交流を、子育て支援や農業従事者育成へとつなげた温かみのある着想が高く評価されました。

農業・地域・女性が拓く日本の未来

―― つながりから生まれる新しい直売所のかたち

群馬県立女子大学 国際コミュニケーション学部 3年
林 ひろみ はやし ひろみ

1. はじめに

飽食の時代と言われる現在の日本で、私たちの食生活は深刻な問題を抱えている。生活習慣病をはじめとする疾病、孤食、偏った栄養バランス、食の安全、過度のダイエットなど、食に関わる問題は数え切れない。必要なものがいつでも購入できる時代だからこそ、食の責任は一人一人に重く課せられている。また、食を支える農業の現場でも問題は山積みで、「縮小」「減少」の言葉ばかりが目立つ。“食”と“農”はピンチを迎えたとも言われている。

私にとっての食と農は、記憶として心に残りながら、自分を形成してきた大切なものだと言える。「アルバイトは枝豆の選別」というほどの田舎で暮らし、様々な場面で農業に携わってきた。祖父母の家は専業農家だったため、毎年の米づくりは親戚総出で行い、野菜も自分たちで苗を植え、成長したものを収穫し、食べるという機会が多くあった。祖父が亡くなってから、田畑の数は減ったものの、祖母や親戚たちで協力して農作物を育てている。その中で、農業が身近にあるこの環境はとても恵まれているのではないか、と感じると同時に、自然や地域の大きな力を実感した。豊かな自然に触れながらの感動体験は人の心に語りかけ、大切なことに気付かせてくれ

るはずだ。そこで、本稿では、農業・地域・女性の関わりをベースに、つながりを大切にした新しい直売所の在り方を提案する。

図1　農業・地域・女性の関わりイメージ

2. 直売所が地域を変える

今、地方の農産物直売所が注目を集めている。マスコミにも大きく取り上げられ、売り上げを伸ばし、都市部の消費者にも認知されるようになった。直売所は、なぜ多くの人々を惹きつけるのか。地産地消のメリットを、大江正章は次のように整理している。

①生産者―多品種少量型（高齢者・女性中心）の販売促進、所得向上、やりがい
②消費者―顔の見える農産物の購入、安心感、新鮮さ、美味しさ、相対的な安全性
③環境―輸送距離の短縮による環境負担（CO_2、NOx）の削減、農薬使用量の減少
④農政―地域農業の振興、遊林農地増大の歯止め
⑤経済―地域循環の推進、ローカルマーケットの創出

以上の利点に加え、近年の健康への関心の高まりも直売所の発展を後押ししたと考えられる。食生活の乱れが指摘される一方で、より良い食材を生活に取り入れ、健康に生きたいという志向が女性を中心に見られるようになった。農産物は無農薬、有機栽培が人気で、添加物の多い食品は敬遠される傾向にある。自然食を実践するマクロビオティックなどにも注目が集まっている。このような動きの中で、安心・安全な食品を販売する直売所が支持され、その数を増やしていき、ブームを巻き起こしたと考える。

しかし、ここで忘れてはならないのが、直売所本来の目的は一時的な流行ではなく、地域の問題解決やその土地の農業を維持することにあるということだ。直売所は、地域住民の理解・支持を得て、共に歩み、成長してきたと言える。多くの問題を抱えた現代の農業であるが、それをチャンスに変え、新しい直売所の在り方を提案したい。

3.新しい直売所の在り方

直売所の意外な特徴として、「女性が活躍している」ということがある。店内で働く女性社員が多いというだけでなく、女性たちの思いから生まれ、女性中心で運営されている直売所は少なくない。農業における女性の立場は、男性の仕事を補助する役目から、自立した活動を行ったり自ら事業を起こしたりと、積極的なものに変わりつつある。直売所に限らず、農業界では、独立を目指す女性たちの動きが多く見られるようになった。今後も、女性たちの間で、食への関心と共に農業への関心が高まっていくと考えられる。そこで、今回注目したのが、「子育てママ」と「直売所」の連結である。現代では、仕事をしているかどうかにかかわらず、ほとんどの女性が育児に対してストレスや不安を感じているという事実がある。労働政策研究・研修機構が約1,500名を対象に「育児にストレスや不安を感じた経験」を調査した結果では、雇用者女性、無職女性共に「ひんぱんにある」が約3割、「たまにある」が約6割となった[1)]。育児に悩む女性たちには“つながり”が必要である。そこから、相談できる相手や、情報を入手するネットワークが生まれると考える。そこで、従来の直売所にある、「農業や地域の活性化」という機能に加え、子育てを支援できるようなシステムを組み込むことはできないだろうか。私が提案する、新しい直売所の在り方は次の通りである。

① 直売所の運営や商品の開発には、子育てをする母親たちが携わる

この目的は、地域に密着した直売所が出会いの場となり、母親と消費者（地域住民、観光客など）とのコミュニケーションが活発にされることである。核家族化、地域のつながりの希薄化が問題視される上に、日本では未だ男性の子育てへの関わりが少ない。それらの理由から、子育てにおける孤立感、不安感、負担感を感じる女性が多くいる。厚生労働省の地域子育て支援拠点事業では、これらの問題を背景に、地域の身近な場所で子育て中の親子の交流や育児相談、情報提供等を実施することが対策として挙げられている[2)]。これは、地域の子育て力を向上させることが目的である。この役割を、直売所が担うというイメージだ。子育てを応援するような直売所をつくっていくことで、子育てしやすい地域づくりを目指す。

② 販売する商品:地域で生産される新鮮な農産物のほか、ママたち考案の加工品

農産物は地域の農家から直接仕入れ、食材の使用例として、家庭ですぐに実践できるようなレシピを公開する。加工品については、食材は地域のものを使用し、子育て目線の商品にする（離乳食やアレルギー対応の商品など）。子を持つ親ならではのアイデアで

商品をつくることで“ブランド”としての価値も生まれる。また、考案する母親たちにとっても、意見を商品に反映させることが、今まで抱えていた問題の改善そのものにつながる。直売所で売る商品には、加工品も含め、生産者の個人名や顔写真などの情報を加える。このようなトレーサビリティによって、消費者は確かな安心感を得ることができる。

③ 農業体験イベントの開催

農産物を提供する農家と連携して、親子で農業を体験できるイベントを開催する。店頭での宣伝や地域での広告のほか、インターネットなどを活用して参加者を募り、地域住民に限らず、誰でも参加できるしくみをつくる。地場産の食材の購入・利用だけでなく、実際に農家の仕事に触れることで、子どもも大人も、食と農の深い結びつきを学ぶことができる。そうすることで、単に値段や安全性を求める消費者ではなく、農業の大切さに気付き、暮らしと農業のつながりを感じられる生活者が増えていくことが期待される。また、ここでは、農業の素晴らしさ、楽しさを知ってもらうことを目的とするほか、町そのものの良さを感じることも目的とする。

親子と農業を組み合わせた例として、子育て中でも一緒にできる農業というものを実践している「子育て農業応援団」が挙げられる。この団体は、金沢の「ぬくもりの郷」、七尾の「じたばた農園」、そして加賀の「畑ひろば・まんま」において子育て支援に関する情報提供、食育や農育の取り組みを行いながら、子どもの豊かな成長を促すことを目的として活動している[3)]。豊かな自然は人の五感を通して多くのことを教え、その後の人生に影響を与えるはずである。特に、子どもたちにとっては、農業体験が、生活の基本となる「食」のイメージや知識を育てることにもつながると考える。

4. 子育てプラスの直売所にできること

この、新しいかたちの直売所にできることは、今までの直売所の機能に加えて、女性やその子ども、そして彼らを支える地域社会の“つながり”を形成することだ。また、つながりから生まれる様々な効果も期待できる。それらをもう一度、農業・地域・女性の3つの側面から整理する。

まず、農業においては、その土地の農業を維持することが第一である。多品種少量型の販売を基本とする直売所によって、地域農家の所得を安定させ、作り手としての意識を向上させることもできる。また、農家と直売所で企画するイベントにより、子どもだけでなく、母親（父親）が農業や食について学ぶ機会が提供される。生きることに直結しているものだからこそ、まずは教える立場の大人が

身をもってその大切さを実感するべきである。次に、地域では、地産地消の代表でもある直売所の存在により、地元農業に活気がもたらされる。また、子育て支援を意識したブランドの開発や道の駅との併設により、観光効果も期待できる。地域の良さを多くの人に知ってもらい、広めていくきっかけとなる。また、直売所を中心としたコミュニティがつくられ、老若男女関係なく、つながりが活性化される。そして、ネットワークを上手く利用することで、地域住民だけでなく地域外の消費者にもアピールすることができる。最後に、女性にとっては、子育てを応援する拠点として機能する。そこで働く女性たちは、母親の細かなニーズに応えるような商品の企画・開発をすることができる。自分たちにしかできないことを強みにして、ビジネスに参加することが可能だ。また、直売所を訪れる人とのコミュニケーションを通して、孤独で閉鎖的な育児を防ぐことができる。

以上3点は、新しい直売所の存在によって互いに作用し合っていく。直売所というものが、本来、地域の問題を解決しようとする目的を持っているため、各地域が抱えている問題・課題に置き換えて考えれば、都市や田舎を問わずどのような地域でもこれらの効果が期待できる。さらに、各地にこの新型直売所が設置され、インターネットなどを通じてお互いが情報を発信し合えば、さらに大きなつながり（コミュニティ）を形成することも可能だ。

5. おわりに

国全体として、農業の衰退が問題視されている。しかし、果たしてそれだけが事実なのだろうか。農業界に新しい風が吹き始め、ビジネスとして異業種から転向したり、今までになかったような生産・販売をしたりして成功している事業も多くある。農業従事者が減少しているのは確かだが、農業者一人当たりの生産量の増加を見れば、生産効率が向上していると捉えることもできる。多くの可能性を秘めた日本の農業は、これからの時代における希望の星である。

自分の根幹にあるのは「食べること＝生きること」という気持ちだと感じる。そして、それを支えてくれている地域農業を想う気持ちは揺るがない。過疎化する地元の姿を目の当たりにし、今、農業を変えていくのは若い力や新しいアイデアではないかと考える。今回の提案はそのひとつであるが、私個人としても、地元に力を還元できるような将来図を描き、地域の課題と向きあいながら生きていきたい。

文中注

1）独立行政法人労働政策研究・研修機構『育児や介護と仕事の両立に関する調査』（2003年7月）
http://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/doko/h1507/index.html

2) 厚生労働省『地域子育て支援拠点事業』
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/kosodate_sien.pdf
3)『子育て農業応援団』
http://kosodatenougyou.seesaa.net/

参考文献

・浅川芳裕『日本は世界5位の農業大国　大嘘だらけの食料自給率』講談社、2010年
・大江正章『地域の力―食・農・まちづくり』岩波書店、2008年
・後久博『農業ブランドはこうして創る―地域資源活用促進と農業マーケティングのコツ―』ぎょうせい、2007年
・田中満『農産物直売所が農業・農村を救う』創森社、2010年
・「農業で稼ぐ！ 高齢化、TTP どんと来い」『週刊東洋経済』第6406号（2012年7月28日号）東洋経済新報社

留学生の部

留学生の部
テーマ

自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会

あるべき社会の姿と私たちの挑戦

私たちには、先人から引き継いだ社会を、自分の子どもたちや後世の人々に、より良い形で伝えていく責任があります。引き継いだ社会を単にそのまま受け渡すのではなく、時代に合わせて改善したり、新しい技術や発想によって抜本的に見直したりしなければなりません。さらに、次世代のために新たな資産を創り出すとともに、発展を阻害するものには適切に対処することも求められるでしょう。私たちは自分たちの子ども世代に、どのような社会を残し伝えていくべきでしょうか。どのような社会を新たに創っていくべきでしょうか。皆さんの知識や実体験に基づいた独自の視点から考察し、その実現に向けて挑戦したいことについて論じてください。

*入賞論文は基本的に原文をそのまま掲載していますが、一部、表記統一などの調整をしています。

大賞 ［留学生の部］

日本と中国を愛し、日中関係の改善を願う筆者の真摯な想いに審査委員が共感。日本と中国の双方の子どもたちに呼びかけた表現手法も独創的でした。

お互いのコミュニケーションのため
――世界の未来である君たちへ

武蔵野大学 グローバルコミュニケーション学部 1年
林 猷琼 りん ゆうじょん（中国）

はじめに

このテーマを見た時、22歳の私にはまだ彼女がなく、自分の子ども世代のために何をしなければならないかということについて考えたこともなかった。中国には「子どもは世界の花であり、教師は懸命に働いている庭師であり、社会は肥えている土壌であり、国はパワーが無限な太陽である」という言葉がある。子どもは未来の世界を担っているので、子育てや教育についての議論はグローバル化し、盛んになってきているが、私たちが今住んでいる世界は本当にそうなのだろうか。

社会の変化及び問題点

つま先で立って競争社会を走るのが、目標でないことは確かである。国と国の領土紛争、右肩上がりで、ケンケン跳びばかりが上手な偏差値社会、繰り返す子どものいじめ問題、それらはいったい何をもたらしたか。例証をあげるまでもなく、毎日の新聞やテレビの報道が教えてくれる。もっと落ち着いた社会を創るために、私たちの価値観をどう定めたら良いのか。

時代の流れにより、社会は発展しつつあり、さらに便利で、豊かな生活の方向に向かっている。祖父が生まれた時代は、世界大戦争

で、教育が受けられず、食べ物があることが人生の最高の幸せだと言われた。父が生まれた時代になって、戦争が終わり、世界の諸国はそれぞれ独立し、国民もちゃんと学校に通うことになった。そして、私が生まれた時代では、科学技術の革命により、パソコンや携帯電話などが国民の生活に染み込み、人間は21世紀の時代を歩き始めた。しかし、今20代になった私の世界で、活字離れ、新聞離れが起きている。落ち着いてイスに座って新聞を読む風景はなく、ゲームや映像に追いかけられる姿の方が鮮明である。しかし、何かが足りない気がする。

——中国にいる私

中学生の時代からずっと好きな中国の近代作家に魯迅がいる。中学の歴史授業では日清戦争や日本の侵略についてしか教えてもらわなかった私は、魯迅が書いた「藤野先生」という文章をきっかけに、日本に対して好感を持ち始めた。魯迅は日清戦争の敗戦によって、日本人の中国への蔑視という風潮の中に身を置き、そして中国人の肉体の病を救う医学は当時の中国社会を救うことができないと知り、医学の勉強をあきらめ、精神的病を治し中国の国民性を改造するために文学に身を投じた。日本留学中、日本の一般の人々とのかかわりを通して、日本人の素朴さを感じる。魯迅は学校の休み中に、仙台から東京へ行く途中に泊まった旅館で、彼が中国からの留学生だとわかって、手厚い待遇を受けた[1)]。また、ある日東京から仙台に戻る列車の中で、老婦人に席をゆずったことをきっかけに、老婦人と雑談し、せんべいとお茶の差し入れをもらった[2)]。学校でも、藤野先生が担当している講義で生涯忘れられない援助を受けた。ノートは初めから終わりまで、朱筆で添削され、文法の誤り一つ一つが訂正してあるだけではなく、多くの抜けた箇所に箇条書きで説明が加えてあった[3)]。実際、今日本に留学しているたくさんの中国人はこのようなことをよく日常生活の中で感じているだろう。

私たちは今はただ戦争の歴史に束縛され、素直に自分の本当の気持ちと向き合うことができないだけである。正しく歴史を認識することは大切だが、いつも歴史の中で生きていくことだけではだめだと思う。歴史の勉強というのは、子ども世代に悲惨な戦争を語り続けることにより、戦争の恨みや報復感情を残すことではなく、戦争を繰り返さないことを学ぶべきである。嫌なことだけを見て、日本人を嫌ってもいけないし、日本の素晴らしさばかり見て、日本は優れているというふうに思うだけでもいけないと思う。日本に留学している私たちは、現代の日本と中国のため、また両国の未来の子ども世代のために、客観的かつ冷静に日本を見分ける必要があると思う。ただ、本やメディアなどを鵜呑みにするだけではなく、きちんと自分の体験を通して、事

実を判断することが大切だと思う。そうすればお互いに通じ合うものが生まれるだろう。

——日本にいる私

3.11の東日本大震災の当日、すべての電車が止まってしまい、帰れないため、一晩池袋駅で過ごすことになった。駅内で避難している時に、偶然、台湾が大好きな日本人の大学生と出会い、いろいろ話しているうちに彼女と友達になった。彼女は今一生懸命、中国語を勉強している、将来は台湾人と結婚したい、そして台湾に住みたいとよく話していた。ある時、「中国の内陸の人はダメですか?」と聞いたら、「だって中国は危ないじゃん、行けない、殺されそう」と即答された。「なぜですか?」と聞いたら、「戦争が原因で、中国人は日本人のことを嫌っていそうだし、普段YouTubeで見る中国は治安が悪そうだし、空気も悪そうだし…」。私は心が張り裂けて、無言のままだった。そのようなことを言われるのは予想したが、いつも本音を隠そうとしている日本人にそこまで強く言われるとは思わなかった。中国人としてずっと誇りを持っている自分はこの瞬間、失望のどん底に沈んでしまった。同世代の日本人の目には中国がこのように映っているのかと初めて知った。

創り伝えたい社会

日本と中国のすべての人々には伝えられないかもしれないが、今の私にできることは、このような人々に私たち留学生の声を伝えることだと感じた。現代社会の人々のため、そして次世代の子どもたちのためにも。

——中国の未来の子どもたちに

祖国の将来の希望である君たち、一つの物事を見る時に、一般論は危険であり、自ら考え、客観的に理解することが大事だと思う。中国に対する日本の侵略については大変憎んでいると思うが、昔は昔、今は今である。魯迅は「私は人をだましたい」[4] という日本語の文章の中で「悲しいことに我々は相互に忘れることが出来ない」、さらに小林多喜二の死を悼む文章で「日本と中国との大衆はもとより兄弟である」[5] と、魯迅自身の日本に対する複雑な心境を述べている。そして、「排日の声の最中にあって、私はあえて断固として中国の青年に忠告を一つさしあげたい。それは、日本人は私たちがみならうだけの価値があるものをいっぱい持っているということだ」[6]。あの戦争の時代に魯迅がそのように言ったことを理解しなくてはならないだろう。現代に生きている私たちはもっと冷静に考える必要があるのではないだろうか。今の日本の生活に、中国の古くからの風習が多

く影響している。特に衣食住を含めた日本の生活、文化の簡素さ、こまやかさ、さらに日本人の礼儀正しく真面目なこと、私たちにとって、勉強できるところはたくさんあると思う。

君たち、少しでも聞いてみてください、日本に留学している私たちの声を。私は日本に留学している4年間に、いろいろな日本人と出会って、嫌な思いももちろんしたが、好きなところがたくさんある。日本に来たばかりの当時の私は、日本語があまり話せなかったが、日本のレストランに行って、メニューを指でさすだけでも店員さんは敬意を持って笑顔で接してくれた。しかし、これが中国だと真逆で店員さんの態度はすごく悪いと感じる。今までずっと中国にいる君たちだが、このような日本を一度見に来るべきだ、そうしたら、その違いをきっとわかってくれると思う。そして、時間通りに運行される電車、ゴミが落ちていない道路、日本社会はあらゆるものの規律がきちんとしている。しかし、今の中国だと、バラバラの時間帯に来る電車やバス、人々は列に並ばないし、行列に入り込むこともめずらしくない。道がゴミだらけで、人口が多いので、このようなことになってしまうことはしかたがないと私も理解できるが、それを私たちの逃げ場にして、このままの中国で本当に良いのだろうか。

中国の昔話「三文魚的故事」（鮭の物語）で「人間は鮭のように時として命をかけて、自ら逆流に向かって這い上がっていく精神が必要である」というように、もう一度魯迅の時代に戻ってみると、当時の文明の遅れや民族の将来などについて懸念していた魯迅は、日中戦争の危険な状況の中においても「日本の全部を排斥しても、真面目という薬だけは買わねばならぬ」[7] と言っていた。21世紀に中国で生まれた君たちはどう思うのだろうか？

――日本の未来の子どもたちに

日本の未来の象徴である君たち、外国の文化を理解するのに、単にうわべだけを眺めることは良くないと思う。その国の人々の感情面での生活に着目し、文化と生活習慣に対する態度のいくつかを理解することができて、初めてその国について少しでもわかったと言えるのではないだろうか。中国人は確かに昔の日本人を恨んでいるが、日本が大好きな中国人もかなりいると思う。私もその中の一人である。

君たちに聞いてほしいことがある。私には今中国に留学している日本人の友達がいて、その彼らの目から見えている中国の印象はこうだ。「中国に来てから、なかなか生活習慣になれず、どこに行っても人が山ほど多く、所かまわず痰を吐く人がいる。公共トイレは汚いし、トイレットペーパーも置いてないし、店員さんの態度が非常に悪い。しかし、中国のことは嫌いではない。中国人は頑張り屋さんで、中国国内は思ったより安全だ

し、大学の学生は非常に努力家で、積極的に声をかけてくれるし、親切な人も少なくない。中国に対する悪い印象はすべてなくなるとは言えないけれど、少なくなっている。中国についても興味を持ち始めた。そして、家電などの製造技術が新興国に急速にキャッチアップされていると同様に、『真面目、勤勉と言えば日本人』という絶対的な評価も、薄れてしまうかもしれない」。その友人が中国に行った時に、中国の出入国審査のカウンターに興味深い機械が設置されていたそうだ。これは、出入国者が直接その場で審査官を評価できる機械で、「Greatly satisfied（大満足）」、「Satisfied（満足）」、「Checking time too long（時間の掛かりすぎ）」、「Poor customer service（ひどい）」の4つのボタンがあり、個々の審査官のID番号毎に評価が集計される仕組みになっている（銀行の窓口などにも類似の機械が置かれている）という話を聞いた。「低い評価になった場合、罰則があるようだ。この機械の設置前後での審査官の態度の変貌ぶりにはかなり驚かされた。パスポートの扱いが丁寧になり、人によっては笑顔も見せるようになった」らしい。中国も頑張っているんだなと思った。だから、他国を評価する際に「＊＊人は不真面目」などと短絡的に国民性を決め付けてしまうことは良くないと感じた。21世紀に日本で生まれた君たちはどう思うのだろうか？

おわりに

国と国とのかかわりがますます増えている今日の国際情勢の中で、いろいろな摩擦や衝突が起き、自分の固有の観念により、相手を認識するだけではなく、異文化の環境において自分の目で直接確かめ、心で感じることが大切だ。相手の立場に立たないと、相手がどう思っているかということは永遠にわからないと思う。国によって、文化はそれぞれであり、いいか悪いかなのではなく、君たちはそれについて、その文化を勉強する価値があると思えば、それだけでも十分だと思う。日本では「お互い様」という言葉があるように、お互いの立場に立つことにより、それが自分をもう一度見つめ直すことにもなる。これからの社会にとって、それはいっそう必要になるだろう。

文中注

1) 许寿裳「我所认识的鲁迅：《民元前的鲁迅先生》序」『鲁迅回忆录（专著）』（上册）北京出版社、pp.476、1991年
2) 许寿裳「亡友鲁迅印象记：二十四日常生活」『鲁迅回忆录（专著）』（上册）北京出版社、pp.291、1991年
3) 鲁迅「藤野先生」『朝花夕拾』人民文学出版社、1926年
4) 鲁迅纪念馆编『鲁迅日文作品集』上海文艺出版社、pp.45、1981年
5) 鲁迅纪念馆编『鲁迅日文作品集』上海文艺出版社、pp.7、1981年
6) 魯迅（編・相浦杲ほか）『魯迅全集』全20巻 学習研

究社、第十巻、pp.421、1986年
7) 内山完造『魯迅の思い出』社会思想社、pp.47、pp.89、1979年

参考文献

・孫長虹「魯迅の日本観」2003年

優秀賞 ［留学生の部］

日本における留学生就労の難しさが、優秀な人材の定着を阻害しているという、留学生ならではの捉え方と具体的な解決策が評価されました。

「留学生活用社会」の創造
――外国人留学生就職における問題の解決と留学生自身にできること

東京大学 大学院 経済学研究科 修士課程 1年
張 辰飛 ちょう しんひ（中国）（左）

東京大学 大学院 工学系研究科 修士課程 2年
馬 一丹 ば いちだん（中国）（右）

1. はじめに

2008年7月29日文部科学省によって策定された「留学生30万人計画」では、日本が世界に対してより開かれた国へと発展する「グローバル戦略」の一環として、2020年を目途に日本国内の外国人留学生受入れ30万人を目指している。また、高度人材受入れとも連携させながら、国・地域・分野などに留意しつつ、優秀な留学生を戦略的に獲得していこうとしている。日本学生支援機構の調査の結果では、留学生数は1998年度以降、2006年度と2011年度での減少を除き、依然として増加傾向にある[1)]。しかし、留学生からの就職目的の申請件数は2009年度から2年連続減少となり、2006年度が2011年度とほぼ同じ水準である[2)]。留学生受入れが拡大している一方、卒業・修了後の社会の受入れが順調に進んでいるとは言えない。

また、日本学生支援機構の外国人留学生進路状況調査によると、学位取得者のうちの日本国内で就職する率は2008年度において25.3%、2009年度は17.8%である[3)]。しかし、2009年度私費外国人留学生生活実態調査「卒業後の進路希望」において、私費留学生のうち56.9%が「日本において就職する」を希望している[4)]。さらに、日本での就職を希望する留学生の希望職種と実績もかなり異な

る[5]。留学生にとって日本での就職が必ずしも希望通りに展開しない状況が明らかとなっている。

予定通りに「留学生30万人計画」の目標を達成できたら、2020年までに外国人留学生の数は2012年現在の約2倍に達する。日本国内での就職を希望する留学生の増加傾向は、今後も続くと予想される。優秀な人的資本をめぐる「人材競争」が国際的に激化してきている中で、日本の国際競争力を強化するために、「いかに高度人材の獲得という目的に合致して留学生就職支援の取組みを推進するか」が大きな課題となる。経済成長や新たな価値創造に資することが期待される、優秀な能力を有する留学生の日本国内就職を促進すると共に、日本での就職意欲のある留学生に成長を支えるプラットフォームを提供できるよう、つまり日本の国益と留学生の希望が同時に実現するよう、留学生就職における現状や問題点から、私たちの子ども世代に創り伝えたい「留学生活用社会」のあるべき姿と私たち自身が挑戦したいことを考えていきたい。

2.留学生就職の現状・問題

近年、日本企業の海外進出や業務国際化の影響により、外国人留学生に対する新卒採用ニーズはますます高まっている。一方、人材の供給源としての留学生も増えつつある。ところが、せっかく素晴らしい能力を持っていても、採用試験で苦労する留学生が多いのが現状である。留学生就職困難の理由について、以下に4つの要因を述べる。

(1) 就職活動の早期化・長期化

留学生にとって、日本における就職活動は本国での就職活動とは異なっている場合が多い。アメリカでは大学生が在学中に就職活動をすることはほとんどない。中国ではおよそ卒業9ヶ月前（大学4年生/修士2年）から就職活動が始まり、半年間ぐらい続く。しかし、歴史と文化により、日本の就職活動は早期化、長期化の傾向がある。特に事務系職種では大学3年生の春から初夏にかけて就職活動を開始することが多い。多くの大学では、1、2年生時は教養や専門分野へ入る前の基礎的な知識を身につけるための講義が中心であり、3年生から専門を絞った講義やゼミナールが開始される。専門的な教育を受けるようになる時期に講義や卒業研究を抜けて、就職活動を行わなければならない。さらに、2年制の大学院では1年生が入学後すぐに就職活動の準備に取り組み始める。院生が多い、過半数が人文・社会科学を専攻する留学生にとって、日本語や就職活動に対する理解の欠如に加えて、就職活動早期化のネガティブな影響がより顕著になる。

1年以上も続く就職活動は留学生自身を鍛える良いチャンスだと思われるが、その困難さのため、日本国内での就職を諦める留学生もいる。

(2) 留学生の日本語力の不足

2011年度東京大学留学生就職（進路）に関するアンケート調査によると、「日本での就職活動で不安なこと」において、日本語力に対する不安が上位を占めている。留学生にとっては、日本語力が就職活動において一番重要な決め手だと思われる。特に文系留学生にとって、就職活動は日本語力が勝負になると言っても過言ではない。日本の就職活動ではほぼ全部日本語を使っている。数少ない企業を除き、最初の書類選考や筆記試験から最後の面接まで、英語を使うチャンスはかなり少ない。このような採用システムにより、留学生に対する日本語力の重要性は一層強まる。

近年、「留学生30万人計画」の推進と共に、海外から留学生を引きつけるために、英語のみによる学位取得が可能となるプログラムが開設され、英語のみによるコースが大幅に増加した。このような英語プログラムは大学院課程がメインである。2年制英語プログラムの留学生は入学時に日本語力を備える人が少ない。なおかつ就職活動の早期化により入学半年後から就職活動に突入し、日本語力を向上させる時間は圧倒的に少ない。また、英語のみによるコースの増加により、以前に比べて留学生が日本語を学べる機会は減っている。採用試験で日本語を使うのが一般的であることにより、英語プログラムに入学した留学生は就職活動において不利な立場におかれることが明らかとなっている。日本語力の不足の影響で、能力が高いと評価された優秀な留学生の中でも内定を取れない人もいる。

(3) 企業の意識と体制問題

日本のことをよく知っていて、かつ語学能力に優れた日本にいる留学生を募集したいと考えている企業が多い。そして日本の企業において留学生向けの特別な採用基準というのはほとんどない。原則として留学生は日本人学生と同じ基準で判断される。しかし、グローバル展開が進んでいる今、日本企業が求めているのは世界で戦える多様な人材だと思う。日本人学生と同じ判断基準で留学生を選ぶことで、日本人の思考や行動パターンに近い留学生を採用する可能性が高い。多様な特性を持つ留学生が採用試験で落ちることにより、違う文化による相乗効果が期待できなくなり、人材の多様性にも欠ける。また推測だが、日本人学生と同じ基準で留学生を採用する理由の一つは、企業側が人材の多様性を向上したいが、留学生の能力を判断できるノーハウあるいは日本人と異なる留学生を管理する健全な体制を持っていない

ことではないかと思う。

また、日本において「新卒採用」が重視されていること等の習慣により、海外採用で学生に求められるGPA、在学中インターンシップの実績、即戦力などより、日本の就職活動では将来のポテンシャルが大切だと思われる。このような採用基準は積極的側面があるが、国際人材市場で優秀と判断される留学生が日本の採用試験で高く評価されにくい。

(4) 留学生向け情報の欠乏

先に示した東京大学留学生就職（進路）調査の結果によれば、「就職の知識不足」は「日本語力に対する不安」を超えて日本での就職活動で一番不安なことである。就職活動がビジネス化した日本では、就職ポータルサイト（リクナビなど）、就職マニュアル本、就職塾、セミナー、大学就職課などからの情報やサービスが充実している。しかし、留学生にとって現状では必ずしも十分に機能していない。日本語力不足は原因の一つである。また、一般論や建前ではなく、留学生の状況に応じて、キャリアパスや就職活動対策などに関する情報や指導は充実とは言えない。日本語力の問題に加えて、どのように就職活動を始めたらいいか分からないため、就職活動の準備を順調に整えられず、留学生就職に困難をもたらすことになる。

3. 社会のあるべき姿・私たちの挑戦

前章で述べた、日本にいる留学生の就職を妨げる4つの問題点を解決できれば、留学生がより良い環境で就職活動に取り組み、日本もより優秀なグローバル人材を獲得できるのではないかと思う。この考えに基づき、私たちが次の世代に創り伝えたい日本社会のあるべき姿は以下のようになる。

- 通年採用の普及により日本における就職活動の早期化・長期化のマイナスの影響を抑える
- 日本語教育支援の強化や英語による採用の増加を通じて、外国人留学生が日本語力に困らず順調に就職活動を行う
- 柔軟な留学生採用基準を導入し、有能な留学生が正しく評価され、日本社会に定着し活躍する
- 留学生向け情報の充実化を通して、日本での就職意欲のある留学生が有用な情報・サービスなどを取得する

このような姿を持つ「留学生活用社会」において、日本の国益と留学生の希望が最大限に実現することになる。本論文が目指すのもこのようなところにある。

「留学生活用社会」の実現のためには、政府、企業、学校、外国人留学生、日本人学生を含めた社会全員の努力が不可欠である。ここでは、筆者らの将来への抱負も兼ねて、

「留学生活用社会」の実現を目指そうとする私たち留学生が挑戦すべきことや挑戦していることだけを述べたい。

まず、積極的に日本人と外国人留学生の交流機会を作り、既存の就職リソースを効率的に活かす。日本社会の変化を待つのではなく、留学生が現状を認識し、その現状に応じて自分自身が変わらなければ、就職難が続くだろう。日本人と交流するチャンスをつかみ、積極的に日本語教育支援や就職センターの指導を利用し、少しずつ経験を重ねて日本語力を向上させていく。また、周りの日本人学生や先生と接することは大事だが、大学外でボランティア活動などに参加して社会人と付き合えば、日本人のやり方・考え方に対する理解を深めることができるだろう。日本語力と日本文化に対する理解の強化により、日本での就職活動に感じる不安を解消できると思う。

そして、留学生同士のネットワークや協力体制を立ち上げる。留学生個人一人でも、フェイスブックやネット上の掲示板に就職活動の心得などを発表することだけでも、誰かの役に立ち、留学生全体の就職活動に良い影響を与えることになる。インターネットを活かし、大きなネットワークを作り出すのも不可能ではない。筆者らは以前から留学生就職問題に注目し、留学生就職の現状を改善しようと思い、2012年7月にヤフーグループというインターネット・サービスを利用し、「東京大学留学生就職グループ」を立ち上げた。現在23名の留学生に無料で公開・非公開の留学生向け就職セミナーに関する情報を配信している。より多くの留学生に有用な情報やサービスを提供するために、グループのプロモーション活動や新規業務を企画している。また、筆者の一人がある人材開発ベンチャー企業に提案し、実際に日本で就職活動を経験した留学生内定者を招き、留学生向けのセミナーを開催した。さらに、留学生同士の情報交換の機会作りとして、2012年4月から毎月筆者らは中国人留学生座談会を主催している。

以上の行動を通じて、私たち留学生がすべての問題を解決できるわけではなく、少しでも「留学生活用社会」の実現にお役に立てたら光栄である。

4. まとめ

今年は「留学生30万人計画」が策定されてから4年目になる。予定通りに「留学生30万人計画」が実行されると、2020年の日本における外国人留学生数は2011年の138,075人から、およそ2.2倍の30万人にまで増加する。これに伴い、日本で就職したい留学生のニーズを無視できなくなる。ボーダレスな世界で人材にとって魅力的な就職環境をいかに創るのか、これは日本の政府や

企業だけの課題ではなく、次の世代の留学生後輩のために日本で生活している私たちが考えるべきことである。

文中注

1) 独立行政法人日本学生支援機構「平成23年度外国人留学生在籍状況調査結果」
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html
2) 法務省入国管理局「平成23年における留学生の日本企業等への就職状況について」表1及び図1
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri07_00061.html
3) 独立行政法人日本学生支援機構「平成22年度外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果」
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11_d.html
4) 独立行政法人日本学生支援機構「平成21年度私費外国人留学生生活実態調査概要」
http://www.jasso.go.jp/scholarship/ryujchosa21.html
5) 芦沢真五「留学生受入れと高度人材獲得戦略－グローバル人材育成のための戦略的課題とは」『留学交流』Vol.10、2012年1月

参考文献

・文部科学省、他「「留学生30万人計画」骨子」、2008年7月29日
・国際人流編集局「日本での就職を希望する留学生の意識と就職支援のあり方」『国際人流』2011年11月
・井上洋「海外留学生は日本の新しいイノベーションを担う大きな戦力になる」『ナジックリリース』第18号、2010年

高校生の部

高校生の部
テーマ

自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会

私たちがすべきこと、できること、やりたいこと

私たちには、先人から引き継いだ社会を、自分の子どもたちや後世の人々に、より良い形で伝えていく責任があります。引き継いだ社会を単にそのまま受け渡すのではなく、時代に合わせて改善したり、新しい技術や発想によって抜本的に見直したりしなければなりません。さらに、次世代のために新たな資産を創り出すとともに、発展を阻害するものには適切に対処することも求められるでしょう。自分たちの子ども世代がより良い社会で暮らせるよう、私たちはどのような社会を残し伝え、どのような社会を創っていくべきでしょうか。皆さんの知識や体験を基に、これからすべきこと、努力してできること、自分として特にやりたいことは何かを考え、論文としてまとめてください。

*入賞論文は基本的に原文をそのまま掲載していますが、一部、表記統一などの調整をしています。

大賞 ［高校生の部］

ヒートアイランド現象、電力不足などの解決策として「小水力発電」に注目し、自分の体験を通して具体的な提案につなげた点が評価されました。

エネルギー地産地消型エコシティの創造を目指して

鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校 1年
木田 夕菜 きだ ゆうな

不透過の鏡窓で側面を覆われたオフィスビルの壁に反射した陽光が、四車線道路の中心を走る青々としたグリーンのベルトを照らしている。それはあたかも、荒涼な砂漠の中に浮かぶオアシスのようだ。

人口60万の中核市である鹿児島市の中心部を南北に走る市電。市民の重要な公共交通機関となっているこの市電の軌道敷内に芝生を植える工事が始まったのは、平成19年。九州新幹線の着く鹿児島中央駅から、市の中心街を通って鹿児島市役所近くの鹿児島駅までの2.8kmの市電の軌道敷に、芝生が植えられた。

市電の軌道敷緑化の目的の一つは「ヒートアイランド現象の緩和」だ。コンクリートやアスファルトに囲まれた都市部では、夜間でも気温が下がりにくく、山村部に比べて総じて気温が高くなる傾向がある。鹿児島市によると、軌道敷の緑化によって地表面の温度が17～18度も違うのだそうだ。本当に芝生を植えたぐらいでそんなにも違うものなのか。疑問に思った私は小学校5年生の夏、宿題の自由研究として、ホームセンターで購入した温度計をもって、市電が行き交う合間をぬって軌道敷内に入り、温度を測ったことがある。陽炎の立つアスファルトの道路から、サクサクとした感触の芝に降り立った時、私は、それまで感じていた足にまとわりつく熱

気から解放された感じがした。実際に、その場にしゃがみ込み、次の電車が来ないか注意しながら測定した温度計の目盛りを見て驚いた。さっき測った緑化されていない軌道敷の地表面の温度が47度だったのに対して、芝生の上は35度しかないのだ。私はにわかには信じられず、次の電車が行きすぎるのを待って、再度測り直したが、やはり結果は変わらない。実に12度も温度差があるのだ。

それだけではない。私は通常の道路と市電との交差点に立ち、両方の道路を交互に見比べた。すると、通常の道路は、まるでモノクロ写真を見ているかのようであるのに対して、緑化されたグリーンベルトの一本道が走る道路は不思議と優しげで、心を和ませられるのだ。また、軌道敷の緑化は都市景観を高める効果に加えて、市電の往来に伴う騒音をも軽減させているという。

先日、県外から親戚が何年かぶりに訪ねてきた。その時、この緑の道を見て、目を細めてこう言った。

「この緑のラインがあるだけで、心が安まるね。この街が好きになりそうだよ。」

ヒートアイランド現象が起こる主な理由は、市街地のアスファルト化、コンクリート化が挙げられるが、このことはより大きな危険を都市にもたらしている。

平成5年8月6日、午後から降り出した集中豪雨はあっという間に市中心部を覆った。死者48名を出す大惨事となったこの時の様子を父が話してくれた。

「確かに叩き付けるような雨が突然降り出してきて驚いたけれど、何より市内を流れ出した水の勢いのすごさに驚くばかりだったよ。」

市内を流れる甲突川の両側には、団地が多い。舗装化されたこれらの団地に降った雨水は一気に団地を駆け下りて、谷間の川へと流れ込んだ。この災害で歴史的建造物である五大石橋も流失してしまった。まだ生まれていなかった私もその時の様子を記録したビデオを何回か見たことがある。よく友達と買い物する街が水没している光景に衝撃を受けた。

この水害の原因の一つとして挙げられているのが、先に述べた都市のアスファルト化なのだ。通常ならば、地面に落ちた雨水は、そのまま地中に染み込み、その後ゆっくりと川へと流れ出す。しかし、行き場を失った都市部の雨水は、瞬く間に固いアスファルトの上を走り、一つの大きな流れとなり、幹線道路すらも、濁流渦巻く川へと変えてしまう。

この水害を教訓にして、鹿児島市では、降った雨水を公園や学校等の公有地の地下の貯水池に溜めておき、少しずつ送水できるような仕組みが整備されていった。私の卒業した小学校も数年前に、校庭の地下に貯水池がつくられた。私は考えた。この一旦牙をむくとたいへん恐ろしいこの雨水をもっと有

効に利用できないか。あの石橋を押し流すほどの水量を役に立てることはできないものか。

2011年3月11日の震災後、日本では電力の確保が大きな問題となっている。再生可能な自然エネルギーをもっと活用すべきだという声も少なくない。水を利用した発電と言えば、水力発電である。ただ、水力発電自体はクリーンエネルギーではあるものの、発電にはダムが必要で、その為に自然保護の見地から反対意見が多い。また、山間地の自然を犠牲にして発電し、その電力のほとんどを都市部で消費しているという現実に、私はいつも疑問を感じていた。それは、原発をはじめとして他の発電所についても同様である。緑豊かな山間地や農村部の美しい自然を担保として、そして時には代償として、都市部の生活は成り立っている。私は思う。その都市が必要とするものは、できる限りその都市で賄うことができるような仕組みはできないものか。

近年、注目されているものに「小水力発電」がある。「小水力発電」とは、「出力1000kW以下の比較的小規模な発電設備」を指し、一般的な水力発電と比べて、ダムのような大規模建造物を必要としないのが特徴だ。本来、水力発電は、石油や石炭、ウランのような可採年数の限られる鉱物に頼らないために、永遠に再生可能なエネルギーである。また、原料を輸入に頼ることがない純国産エネルギーでもある。加えて、地球温暖化の原因の一つとされる二酸化炭素の排出量が極端に少ないという利点がある。そこで私は考えた。既に開発された都市部の地下にある貯水池に、この「小水力発電」施設をつくることはできないのだろうか。都市部に降った雨をそのまま下水に流してしまうのではなく、小規模でも発電タービンを回す力として雨水を活用するのだ。一つ一つの発電施設は小さくても、都市部の地下にたくさんの発電施設ができ、それを集めれば大きな電力をつくり出せる。これならば、山間部の美しい自然を破壊することなく、同時に都市部の防災も行うことができる。そして発電に使った水は、道路に敷いたパイプを使って、夏場ならばヒートアイランド現象をおさえるための打ち水として、冬場ならば凍結した路面を解かすために散水する。

そしてその一方で、都市に林立するビルの屋上にはソーラーパネルを設置することを義務づける条例を制定する。勿論、その為に市は補助金制度等を設けて、その整備を補助、支援する。これならば、晴天時は太陽光発電、雨天時は小水力発電というように、発電主体を上手に切り換えながら電力不足を補い、環境に優しい発電を行うことができるのではないか。

次の時代を担う私たちが目指すべきは、この国が世界に誇れる自然豊かな日本の原風景を壊すことなく、人々が住む都市全体が青々とした緑に包まれ、自然エネルギーを生かして自分たちに必要な電力は自分たちで生

み出す「エネルギー地産地消型エコシティ」の創造なのではないだろうか。

私は思う。戦後、この国を支えてきたのは、私の祖父母や父母の世代による絶え間ない挑戦と研究による技術革新だった。だからこそ、この国のもつその遺伝子を受け継ぎ、「環境」か「開発」かという二者択一の選択ではなく、「環境」と「開発」の両方を実現する新しい都市づくり、国づくりのグランドデザインを、私は未来という名のキャンバスに描いていきたいのだ。

参考文献

・環境省「小水力発電情報サイト」
http://www.env.go.jp/earth/ondanka/shg/page01.html
・国土交通省九州地方整備局「都市行政」
http://www.qsr.mlit.go.jp/n-park/city/index_e03_i.html

優秀賞 ［高校生の部］

街頭インタビューを行った行動力と、礼儀や高齢者の知恵を次世代に伝えるための世代間コミュニティというユニークなアイデアが評価されました。

世代間交流による学びコミュニティーの構築

桜蔭高等学校 3年
岩間 優 いわま ゆう

1 はじめに

自分たちの子どもの時代には、いま叫ばれているグローバル化はよりいっそう進化していると想像する。日本は国際競争力を高めながら、独自の発展を実現し、さらなる自国の強みを創り出している社会に私たちはすべきである。他国にはまねできない日本ならではの文化や技術、そして価値観を力にして、これまでの先人が築いてきた歴史をつなげながら、未来に向けて新しい日本の創造を考えていきたい。

そのときに要になるのは人の知恵や知識だ。その知力を備えた人材を育成すべく、地域教育のあり方を提言する。

2 子育て世代が次世代へ伝えたい『日本の学び』

日本独自の学びは必ずしも専門性の高いエリートを育成する教育だけではなく、礼儀を大切にする心、共助共生の精神など社会性の高さが特性のひとつである。また丁寧で緻密な技術力の高い仕事ができる強みも備えている。次世代に伝えるべき学びは多岐にわたると想像する。そこで、私は幼児の子育て

中にある母親に『子どもに伝えたい日本の学び』についての街頭インタビュー調査を実施することにした。調査は区立幼稚園が近くにある江東区南砂町商店街でおこなった。

回答者は50名（約6歳未満の男女園児の保護者）。インタビュー内容は以下の通り。

- 子どもにいちばん伝えたい日本の学びは？
  （読み書き・計算、昔遊び、伝統行事、礼儀などジャンルを問わずに自由回答で）
- 教え、伝えるのはだれが望ましいか？

以上2項目の質問について回答いただいた。

子どもに伝えたい学びとして、読み書き・計算などの勉強面はほとんどの親が学ばせたいとは思っているが、いちばん伝えたいと思う選択肢として回答したのは4名、お手玉・けん玉・折り紙など日本独特の遊び文化が8名、正月や盆などの行事が10名、最も多かったのが25名の「礼儀」という回答だった。その理由を伺うと、「礼儀正しいことで、大人になったときに人間関係がスムーズになる」「あいさつがしっかりできるなど、人として基本的なことがきちんとできる子になってほしい」など家庭の教育方針が垣間見られた。また、その礼儀の教えを伝えるのはだれが望ましいかという質問の回答は両親が8名、祖父母が10名、地域の高齢者が5名で、礼儀を教え、伝えたいと回答した25名中でその担い手を両親よりも祖父母や地域の高齢者と回答している人のほうが多かった。「親として自分自身が礼儀を教える自信に欠ける」「別居している祖父母には頼れず、地域の高齢者からも子どもに礼儀作法を伝えてほしい」という意見もあった。結果的に子育て世代も地域の高齢者の力を借りることを望んでいる回答が目立った。

このように親としても高齢者から学ぶ子育て支援を求めつつも、それが地域でシステム化されていないと実際には教えを受けることが難しい現状もあるのだと思う。教え伝える立場からも、そういった実践の場があればスムーズにできることも、昔のように地域でおせっかい年長者が機能していた時代とは違ってきているなか、現状では難しいようだ。

3 海外でも称賛される日本の教えと学びを世代間交流で再確認

私が昨年の春に台湾を訪れたときのことだ。現地では、流ちょうな日本語で当時のことを熱く語るお年寄りに話を聞く機会を得た。台湾には日本統治時代に日本の中等教育以上を受けたトオサン（多桑）と呼ばれる人たちがいる。正直であること、勤勉であること、時間を厳守すること、親孝行すること。どれも日本統治時代に教わったことだという。そしてその考え方をいまもずっと心にとめているのだそうだ。台湾人には日本の精神に影響されたよい面とは反対に、日本に対して憎悪の思

いもあるのではないかと私は内心心配に思っていた。しかし、その後にその不安が解消される話を聞くことができた。「残念な過去を忘れることはできないけれど、心を広くもって、憎むことや恨むことを忘れて相手を許し認めることも日本人から学んだ」と。さらに「苦労したからこそ豊かな人生になった」のだと聞いたとき、私はその不屈の精神に涙が溢れてきた。台湾の近代化に尽力したひとり、新渡戸稲造が提唱した「信」「義」「仁」などの武士道精神が深く台湾人の心に浸透していたことに、私はあらためて気がついた。

この体験を通して、私は地域社会のなかで、古き良き日本の学びを私たちの子ども世代にも伝えたいという思いをいっそう強くした。

4 世代を超えた地域社会での『学びコミュニティー事業』の構築

これからの時代にこそ、衰退してきつつある昔ながらの地域での教育を見直し、日常のなかで習慣的に学んだことを次世代へと、そしてグローバルにつなげていく必要がある。それにもかかわらず、現状は少子高齢化が進み、家庭や地域社会で異世代が関わり合う機会が減少している傾向にある。地域や社会と関わるきっかけが得にくいために、孤立した若い世代やさまざまな不安を抱える高齢者も増える一方だ。そこで世代間交流での学びの場を設けることで、子どもの社会性や情操性を育てるとともに、高齢者世代の生き甲斐、人間関係の充実や社会参加による健康維持を促進する。

幼老施設の複合化は単にハード面だけでは意味がない。ソフト面での事例を多様化していきながら、常に活性化し続ける『学びコミュニティー事業』であるべきだと考える。子どもや高齢者だけに限らず、地域の住民全体を巻き込んだ縦、横、斜めの関係でさまざまな人との関わりを持つことができるようなシステムだ。例えば地域に外国人が住んでいれば、受け入れて多様性のある学び場にしたい。ハンディキャップのある人がいれば共に交わることで思いやりの心を養い、互いに共感しあえる社会をめざすこともできるだろう。経験豊かな高齢者からは積み重ねてきた専門的なノウハウを学ぶこともできる。何より自分と異なる考え方に出会うことでコミュニケーション能力を向上させることができる。異論を受け入れながら合意していく過程を学ぶことで、異文化を持つ世界へ自国の文化を発信することもできるようになる。

新潟県上越市の保育園士雇用事業は、核家族の増加で子どもたちが祖父母世代と接する機会が極端に少なくなったことをきっかけに2000年に始められた。高齢者との世代間交流による園児の情操教育、中高年世代

の雇用機会創出、保育士の現場での負担軽減などの効果が実績として認められているという。上越市のように契約形態が市の嘱託職員（非常勤一般職）としての採用によって雇用を生み出すことでなくても、ボランティアとして登録し、保育の補助などに参加し活動する場合など、さまざまなやり方で、学びを支えるシステムを地域に備えることは有用であると私は考える。活動内容も多様化していることが望ましい。例えば年間行事や伝承遊び、草花・生き物の世話などの整備、簡単な施設の修繕など大工業務や清掃、散歩や遠足などで交流しながら、子どもたちはその経験を通して学んでいくことができるからだ。

5 まとめ

日本には受け継いできた独自の文化があり、それを次世代へとつないでいく使命を私たちは担っている。自治体や国、企業を巻き込みながら『学びコミュニティー事業』を後押しする策を全国各地で体系化することをめざしたい。

参考文献

・日経電子版読者に対するインターネット調査「地域活性化に関するアンケート」
2012年8月実施、有効回答数1,820件
調査主体：日本経済新聞社デジタルビジネス局、調査実施機関：日経リサーチ
・新潟県上越市「保育園士雇用事業」の概要資料
・新渡戸稲造『武士道』岩波書店

優秀賞 ［高校生の部］

祖父母が守ってきた里山を残したいという筆者の思いを、里山、自然環境の保護への力強い提言にまとめたことが共感を呼びました。

次世代に残す「里山」
――コウノトリの舞う環境を守る農業の実践をめざして

神奈川県立中央農業高等学校 2年
谷口 淳人 たにぐち あつと

私の父母の実家は福井県にあります。谷口の家は代々続いた農家で、ご先祖様の住んだ家が越前市の味真野苑という公園の中に「旧谷口家住宅」と名づけられ、国指定重要文化財として保存されています。これは19世紀の越前平野によく見られた角屋（つのや）形式の民家のもっとも発達した住居だということです。この家には昭和50年頃まで親戚の人が実際に住んでいました。当時は田圃の広がる風景の中に茅葺の民家がよく似合っていたそうです。

同じ越前市内で私の祖父母も農業を続けてきましたが、平成22年の12月に交通事故にあい、二人とも亡くなってしまいました。まだ私が高校に入学する前のことでした。そして今、祖父母が耕してきた田畑と山が残されています。私の父は神奈川県で高校の教員をしています。母と兄と私の4人家族は神奈川で暮らしており、田舎の田畑は祖父母が守っていたのですが、突然の祖父母の死によって実家は住む人を失い、田畑もどうしたらよいものか、父母も困ってしまいました。しかし、田圃を荒らすわけにはいかないので、地元で集団営農をする人たちにお願いして、実家の田圃を耕作してもらっています。

祖父は長い間消防署に勤め、10年ほど前

に退職してからは、毎日のように山に入り下草を刈り、雑木を伐採したりして山の手入れを続けました。近所の人が「谷口さんちの山が一番きれいだ」と言ってくれるほどでした。私たち兄弟が生まれた年には、それぞれ杉の苗木を300本ほど、記念に山に植林をしたそうです。生前に祖父母と山に登って見に行ったときには、直径15cmくらいに育っていました。また山の斜面にシイタケのほだ木をならべてあり、毎年おいしいシイタケができました。私が幼稚園の頃に山に行くとアケビの実がなっていて、祖父は高い木にはしごをかけてスルスルと登り、とってきてくれたことを覚えています。田圃では、一番山際の、山からの湧き水を引き入れる田圃でとれる米が一番おいしいと祖父はいつも言っていましたが、実は山からの水は水温が低く、苗の管理はすごくむずかしかったのです。それでも祖父は他の田圃より多い収穫量を上げていたそうです。

私たち兄弟が夏休みや春休みに田舎に帰ると、祖父は軽トラに私たちを乗せて、よく畑や山に連れて行ってくれました。スイカをとったり、カボチャをとったり、作業の手伝いをしてほめられました。小さい頃に稲刈りのコンバインに乗せてもらっている写真が今も手元にあります。私が農業に興味を持ったことには、この経験の影響があると思います。農業高校を受験することを決めて、その気持ちを話す前に祖父母が亡くなってしまったので、そのことを聞いたらどんなに喜んでくれたかなあと今も心に残っています。

私は現在農業高校の2年生。園芸科学科に在籍しています。日々の実習でトマトやキュウリを作ったり、バイオ技術で絶滅危惧種の植物を培養する研究をしたり、農薬や化学肥料の安全性について学んだりしています。私は将来「自然環境を守る農業」、つまり環境汚染のない農業の実践をしたいと考えています。昨年の東日本大震災に伴う原発事故により、放射能汚染の問題が起こりました。放射性物質による汚染は非常にまれな例ですが、食料の生産基盤である土壌や水が汚染されると、その生産物の安全性は損われます。この主な汚染源は化学肥料と農薬です。これからの農業では、いっそうの食の安全のために有機肥料を主として、農薬もより安全性の高い物を改良していくべきだと思います。

福井県内では現在、有機肥料を用いた特別栽培米が推奨されており、実家の田圃でも「エコハナ一番」という有機肥料を使っています。化学肥料をやめて有機肥料の使用が広まったため、ドジョウやオタマジャクシが田圃に増えたそうです。50年近く前にコウノトリが越前市に棲みついたことがあり、父も子供の頃に間近でコウノトリを見たそうです。それで越前市では以前から、コウノトリが生息できる環境を再生しようという活動が行われているのですが、今年になって、実家の田圃の

あたりでもコウノトリの目撃情報がありました。これは確実に自然環境が改善されていることを意味します。

先日、日本の原風景として「里山」を取り上げるテレビ番組を見ました。それは岡山県にある棚田の風景でした。実家のある越前市は全体が盆地で、祖父の家は大虫町というところにあります。市の中心からだんだん標高が高くなり、一山越えると越前海岸へ続く位置にあります。いわゆる中山間地域と呼ばれる地形で、近くに大虫の滝という小さな滝があります。その流れが小川になって町内を流れています。田畑を取り囲んで山林があり、昔から人々が山の木々を生活に利用してきました。テレビで見る「里山」の風景はまさに私のふるさとの田圃や山の景色です。私は「里山」についてインターネットで調べてみました。日本の国土の約4割が「里山」といわれる地形です。昔から人々の生活の場として、人が手を加えてきた二次的な自然林ということができます。ここでは人間と動植物の「持続可能な共生生活」が成立していたのです。実家の田畑にはイノシシが出ますし、猿が出ることもあるそうです。父は以前、祖父と山に入ったとき大きなニホンカモシカを見たと言いました。福井県内ではシカというとカモシカのことなのですが、祖父は山で何度もシカと会っています。あるとき子牛ほどの大きなオスジカと出会い、にらみ合いになったそうです。どうして逃げないのかと思ったら、その後ろにメスのシカもいて、メスを安全に通らせる間、オスジカが前に出て頑張っていたそうです。

また、山の中では木の実や山菜がとれたり、カブトムシを捕まえたりもします。小学生の頃、実家の山でミョウガを摘んだり、ゼンマイをとったりしました。家族みんなで大きなカゴに何杯もとってきたミョウガをパックにつめて青果市場に出したこともあります。

「里山」はこのように人間と動植物が関わる貴重な自然環境です。代々、谷口のご先祖様が守ってきた杉やヒノキの山林は、祖父の代で新たに植林した部分もあれば、樹齢が100年を超えるような樹木もあります。祖父が新たに植えた杉も約20年がたちました。祖父は一人で雑木林もよく手入れしてきて、伐採した木をシイタケのほだ木にしたり、薪として燃料にしたりしてきました。

雑木は伐採すると、翌年にはひこばえが出ます。普通、5年後くらいに「もやかき」という間引きをします。さらに10年後にもう一度「もやかき」をします。20年で元の大きさの林になり、また樹木として伐採して利用できます。温暖で湿潤な日本の気候では、木々の枝は少しくらい切ってもすぐに育ちます。「里山」はそれ自体がリサイクル可能な資源といっていいと思います。

祖父が亡くなって、これから父が定年に

なったら福井へ帰って、山の管理も何とかしたいと言っていますが、その次の20年は、私たちの世代の役割です。「里山」の環境を守り続ける社会こそ、これからの日本に必要なものではないでしょうか。私は高校を卒業したら農業大学へ進学して、さらに農業技術の勉強をしたいと考えています。福井に限らず日本中で、ドジョウやオタマジャクシが棲める田圃、コウノトリが舞い戻ってくる田圃の自然環境を、私たちの代で取り戻したいと思います。

優秀賞 ［高校生の部］

子どもたちが世の中への興味、関心を持てるように、子ども向け週刊誌を発行するという筆者の意欲が、審査委員の応援したい気持ちを呼びました。

今どきの子供が未来を創る
――興味が繋ぐバトン

頌栄女子学院高等学校 2年
舛田 桃香 ますだ ももか

「今どきの若い子たちは」という言葉を年配の方が口にしているのをよく耳にする。しかしこれは、今若者たちに向けて言っている方々自身も言われてきた言葉に違いない。なんと平安時代から言われてきた言葉だからだ。あの有名な枕草子で清少納言は、『何事を言ひても、「その事させんとす」「言はんとす」「何とせんとす」と言ふ「と」文字を失ひて、ただ「言はむずる」「里へ出でんずる」など言へば、やがていとわろし』とその時代の人々の言葉の乱れを嘆いているが、きっと清少納言自身も文学以外では言われたことのある言葉であろう。

ではいつの時代が正しかったのかと言えば、正しい時代など定義できない。だが、遠い昔からずっと変わらず伝わり、自然と日本人に染みついている文化と教訓は正しいと言えるのではないだろうか。「今どきの若い子たちは」と言っている人が現代にもいるということは、きちんと時代が移り変わっている証拠ではないかと考える。平安時代を生きた人々が私たちの生きる現代社会の抱える問題を予想できなかったように、次世代の子供たちが生きていく世の中では、私たちが予想もできない新しい問題がたくさん発生するであろう。未知の世界に進むことは怖く、心配なことである。しかし歴史がどんどん積み重なり、その中で生まれる教訓によって私たちの生活は成

り立ち、問題を解決してゆく。私たちもその教訓となれるように、古来より伝わってきたバトンを改良して受け渡さねばならない。

何かを伝えるためには、聞き手に興味を持ってもらわねばならない。聞く気がなければいくら私たちが何かを伝えたところで何も残らない。そして時代を創っていくという責任感や臨場感も次世代に生まれない。現代の社会ではテレビや新聞、雑誌、インターネットと、様々な媒体から情報が伝えられている。そして子供たちも含めて、現代の人々はこのようなメディアからの情報に触れる機会が多い。しかし今の若い世代は果たしてメディアからの情報を受け、今の世の中に興味を持っているだろうか。今日よく報道される「選挙に行かない若者が増加している」という事実からも、若い世代が世の中にあまり興味がないことは明白だ。テレビやインターネットを見ていても、政治の動きや社会問題、国際問題に興味があって見ているわけではなく、単に娯楽要素として利用していることが多いからである。私たちが次世代の子供たちに残すべきことは、まさに「世の中のことをもっと聞きたい、知りたいと思う気持ち」である。そのためには小学生や中学生などのまだ頭の柔らかい頃から世の中に興味を持つ傾向を作らねばならない。

小さな子がおままごとでお母さんの真似をするように、子供は大人やお兄ちゃん、お姉ちゃんの真似をして自分も大人になったような気分を味わいたいものである。私も小さい時はよくぬいぐるみで幼稚園の先生ごっこをしたり、大人のようにハイヒールを履きたくて母のハイヒールを履かせてもらったりしていたことを覚えている。これは幼少期だけでなく、小学生や中学生の女の子が化粧をしたがるように比較的大きくなってからも続くものではないだろうか。そこで私は、この子供の大人への憧れを上手く利用できないかと考えた。

私はジャーナリストになり、小、中学生向けの週刊誌を作りたいと考えている。ただの芸能情報や偏った考え方しか載っていない週刊誌ではない。子供が政治や世の中の動きに興味をそそられるような、分かりやすく読みやすい、遊びながら読める教育雑誌である。よく書店で、お母さんは雑誌を読んでいるが子供だけ飽きてつまらなそうにしている光景を目にする。そこでお母さんは子供に読ませたい本を選んできて隣で読ませるが、そう簡単に興味のない本を大人しく読んでいる筈がない。自分もお母さんと同じように雑誌が読みたいのに、大人向けのファッション雑誌や難しい漢字で書かれた週刊誌がずらりと並ぶ書店では読むものがなく、結局、子供向けの娯楽雑誌や絵本を読まざるを得ない。中学生ならば好んで中学生向けファッション雑誌を読んでしまうだろう。

優秀賞［高校生の部］

今どきの子供が未来を創る
――興味が繋ぐバトン

これは実にもったいないことだ。こんな問題が「子供向け週刊誌」によって解決されるのだ。子供は、「面白そう」と思ったものには何でも飛びつく。カラフルな色合いや、挿絵のあるものには興味をそそられる。子供向けのビールという名目のジュースが売れるように「大人向けの商品」が「子供向け」に改良されているものにはことさらに興味を持つのだ。そしてそれがその人にとって意味のあるものであり「もっと」と思うことができたならば継続する。まずは週刊誌を読む憧れで、子供の心をつかむのだ。

みなさんも「飛び出す絵本」をご存じだろう。富山県射水市の大島絵本館で手作り絵本のコンクールが昨年行われた。カラフルな絵本や飛び出す絵本など作りは様々だ。参加者の中に、小学生の頃仕掛け絵本を読んで感動したことがきっかけで応募した方がいた。また取材した方は、「話の面白さや趣向を凝らした装丁を楽しんでいるうち、ついつい絵本館で長居してしまったことがある」とコメントしていた。このように、娯楽要素をたっぷり含んだ絵本には、大人までが心を奪われて引き込まれてしまい、また子供の頃受けた印象や記憶はずっと残るのだ。

この絵本が与える感動を週刊誌に取り入れれば、いとも簡単に子供の心をつかめるはずだ。子供向け新聞が現在普及している。私も小学生の時に読んでいたが、子供向けとはいえやはり長い文章がずらりと並び、逆に興味を削がれてしまったことがある。そして結局、漫画だけを読んでやめてしまうということが多々あった。同様の理由で読むことを止めてしまった友人もたくさんいた。

そこで長い文章だけを並べるのではなく、漫画も取り入れたレイアウトにすることが大切だ。もちろん政治的内容の漫画である。よく歴史を学ぶための漫画の本があるが、まだ歴史を習ったこともない私の弟が、小学校低学年の時に、とても面白い挿絵の多い漫画の歴史図鑑に熱中し、小学校高学年で歴史を勉強していた私と話がぴたりと合うことがあった。

漫画で勉強なんて、と思う方もいるであろう。確かにその分野の細部までをすべて学ぶ事は不可能に近い。しかし実際、記憶として残すにはとても適している。語呂合わせで「いい国つくろう鎌倉幕府」と覚えることと同様に絵と関連付けて記憶の中に定着させるのだ。つまりエピソード記憶のうちの映像記憶である。これを利用して、現代の政治の流れを知ってもらうために政治家を題材とした漫画で表現すれば、楽しみながら、そして記憶に定着する方法で政治を学ぶことができる。

「社会に興味を持ってもらう」ことを目的としているので、まずは知ることの楽しさを伝えたい。それさえ分かれば、詳しく学ぶ意欲も

湧き、「これでは駄目じゃないか」と日本の将来に不安を持ったり、「こうすればよいのに」と意見を持ったりする子供も出てきてくれるに違いない。この気持ちこそが未来を動かし、変えてゆくには必要であるから、私たちがすべきことは子供たちに「世の中のことをもっと聞きたい、知りたいと思う気持ち」を持たせることなのである。この「子供向け雑誌」という、いかにも「今どきの若い子たちは」と言われそうな手段にぜひ乗ってみようではないか。子供たちの未来を創る意欲を育てる、「興味」が世代を繋ぐバトンとなるのだ。

参考文献

・清少納言（松尾聰・永井和子―校注・訳）『枕草子』新編日本古典文学全集　小学館
・「手作り“3D”絵本　飛び出す「三国志」富山・射水」『中日新聞』（中日新聞社、2011年3月11日付夕刊）
・前野隆司『記憶　脳は「忘れる」ほど幸福になれる！』ビジネス社

特別審査委員賞 ［高校生の部］

被災地を訪れ、多くの被災者の思いを聞く体験を通して震災以降の日本を正面から捉えたこと、また率直な意見が、審査委員の心に響きました。

自然と仲良く暮らすために
――知ること、考えること、伝えること

三重県立四日市高等学校 2年
伊藤 茜 いとう あかね

従姉が結婚式を挙げた。私たちは家族で招かれ、初めて花巻市を訪れた。花巻は内陸にあり、大震災の傷痕も見当たらず、穏やかな景色が広がっていた。震災の一週間後、従姉は釜石で新しい生活を始めるはずだった。住むはずだったアパートも、勤めるはずだった薬局もすべて津波に呑み込まれた。地震直後、海沿いを車で走っていた彼とは三日間連絡がとれず、遠く離れた三重県で、従姉も私たちも、次々飛び込んでくる信じられない映像に呆然とするだけだった。あれから一年半、二人はアクシデントを乗り越え、この日を迎えた。

華やかな結婚式の翌日、私たちは花巻を離れ、気仙沼から南三陸に向けて出発した。ここから気仙沼という標識を見て、テレビで見たあの風景がいつ目の前に現れるのかと緊張した。だが意外にも、かなり海に近づくまであんな悲劇が起こったとは思えないくらい静かな様子だった。人々の生活も落ち着いてきたのか。しかしよく見ると、人の気配の消えた家、シャッターの錆びついた商店が目立つ。気仙沼漁港には観光客もいて賑やかだったが、そこ以外はまだ活気溢れる町とはほど遠かった。南三陸に入ると、海沿いに開ける平地はこれから団地の建築を待つ造成地のようだった。そこに何かがあったのか、最初から何もなかったのか、一見しただけではよ

くわからなかった。

翌朝、震災を経験した人が語り部となって町を案内してくれるバスに乗った。車窓から見えたのは、テレビで何度も見た、津波によってさらわれた町の残骸だった。造成地のように見えた場所には、砕けた家の基礎が残り、何ごともなかったように見えた立派な建物も、破れた窓の中を風が吹きぬけていた。所々に瓦礫の山が築かれ、へしゃげた船、錆びた車の墓場もある。そこにあったはずの家も店も人々の暮らしも何もなく、ただ草だけが逞しく生きていた。ほんの少し坂を登っただけの高台には、洗濯物の干された家が点在し、生死を分けた僅かな差を実感した。この家とて無事だったわけではないだろう。瓦が落ち、窓も割れ、家財も散乱しただろう。けれど何とかこうして日常を取り戻している。大きな地震ではあったが、それだけなら復興も早かったはずだ。あの津波さえなければ。

町の商店主たちが協力して立ち上げた商店街もできている。利用者の八割は旅行者だと聞き、たった一泊の旅で、ボランティアもできずに帰る後ろめたさが少し和らいだ。海辺に建ち、屋上まで津波に曝されながら一人の犠牲も出さなかった戸倉小学校は、校舎も震災直前にできた体育館も跡形もなかった。生徒一人と先生が亡くなった戸倉中学校は高台にあった。こんなところにまで津波が来たというのか。最後まで住民に避難を呼びかけ亡くなった職員の方がいた防災センターにも立ち寄った。錆びた鉄骨だけになったセンターには、屋上にあるアンテナの途中まで波が来て、たくさんの命を奪った。外階段はぐにゃりと曲がり、津波の威力を見せつけていた。

「この町の姿をカメラに収めて、たくさんの人に見てもらってください。観光に行くのは気が引ける、などと思わないでください。」

語り部さんの言葉は、これからもこの町で生きていく決意が感じられた。この先どこに住めばよいのか、仕事はあるのか、仮設住宅で不安に駆られながら小さい子どもたちを育てている若い人たちのストレスを、自身も仮設に住み、幼い子ども二人を持つ親である語り部さんが話してくれた。いつまでもひとから頂いた物資で子育てをしたくない。けれど、自分では買ってやる余裕もない。じゃあ、どうしてほしいのか、どうすべきなのかもわからないというのだ。子どもたちの遊び場は狭い仮設の中とその周辺だけだ。中高生が、休日に遊びに行く店も、夕暮れまで語り合う公園もない。こんな生活が続くと、町に対する愛着は薄れ、みんな出て行ってしまうかもしれない。元の生活に戻るためには、物理的な問題だけがクリアされてもだめだ。元の場所で、元の仲間と、元の仕事があってこそ叶うことなのだ。

福島はこの問題を解決できるのだろうか。壊れた建物を撤去し更地にすることも、行方

不明の人を探しに行くこともできない。ボランティアも観光客もなく、そこで今何が起きているのかを知る手だてもない。そしてこの状況がいつまで続くのかさえわからないのだ。地震だけなら、いや津波だけならまだましだった。放射能さえなければ、ゆっくりとでも立ち直れたのに。元の場所での生活を希望する人が減少したという。戻りたいと言えば戻れるのか。命の保証もない土地で子育てをしたいという人がどれだけいるというのか。国は、避難区域の人がみんな諦めるまで、じっと待っているだけなのだろうか。

これだけの経験をしてもなお、私たちは原子力発電に依存しなければいけないのだろうか。原発先進国のフランスでさえ、いち早くエネルギー政策の見直しを始めたという。私は原発には反対だ。けれど声高に反対を唱えられるほど、国のエネルギー事情を理解しているわけではない。本当に必要な電力はどれくらいなのか、足りない分は我慢では補えないのか。安全な再生可能エネルギーを開発することに、なぜもっと積極的になれないのか。知らないことばかりだ。フランスの原発からすぐ近くにあるドイツの小さな町で、住民がお金を出し合って再生可能エネルギーの活用に取り組んでいるという話を聞いた。自分たちの手で自分たちの生活を守るという考えは、今の日本に欠けているのかもしれない。豊かな暮らしは国に頼るだけでなく、現状を批判するだけでなく、自分たちで考えることから始まるのだと思う。

私の住む町は、かつて公害の町と呼ばれていた。多くの犠牲を払い、今私たちは普通の生活ができているが、今でも工業都市としてコンビナートに依存している部分が大きい。いずれ来るであろう南海トラフ地震の際には、この地域にも五メートル程度の津波が押し寄せ、コンビナートのある埋立地は液状化すると予測される。私の家も水と火に包まれるかもしれない。私は安全に暮らす方法、自然とうまく折り合いをつける方法を知りたい。地熱発電や風力発電についてもっと知りたい。知ることがたくさんの人の命を救うことに繋がるのだと思う。大学では地球工学、環境工学を学びたい。立ち向かうには大きすぎる自然とも、もっと仲良くする方法があるはずだ。災害から命を守ること、自然の恵みを利用して暮らしを豊かにすること、私に何ができるのかはわからない。けれど、正しい知識を身に付けて、それをできるだけたくさんの人に伝えたいと思う。『津波てんでんこ』の教訓のように、不幸な出来事から学ぶことはたくさんある。経験や知識を前に向けての力に換え、もっと先の人たちに伝えていくことが私たちの使命だと思う。震災を機に見つけたこの目標を、私は必ず達成したい。

NRI学生小論文コンテスト2012

募集告知から審査、そして表彰まで

募集告知

次の世代に残すもの、そして新たに創り伝えるものとは

2012年のコンテストの概要が決まったのは5月初旬。
5月10日のNRIホームページ上での募集要項発表とともに、
コンテストはスタートしました。以降、今年も多くの皆さんに
コンテストに応募いただこうと、告知活動を展開しました。
チラシやポスターの配布、新聞や雑誌への広告掲載。
全国の高校や大学にも案内を送付しました。

二つの赤い球

隣接した大小の赤い球体が、今年のコンテストのシンボルになっています。今回の論文テーマである、今いる自分たちの社会と、次の世代に創り伝えたい社会、あるいは残していくものと新たに創り出すもの、を象徴しています。

「自分たちの子ども世代」をテーマに含めた意図

一般論を展開するのではなく、応募者自身が自分ごととして社会をとらえ感じることを、文章にしてほしい。そのため、自分たちにより切実となる「自分たちの子ども世代」という言葉を選んで、テーマを設定しました。

ペア応募のねらい

2011年のコンテストから、ペア応募を受けつけています。互いに話し合うことが、考えをより深めることにつながるとの考えからです。

全国の学校、書店で……コンテスト応募を呼びかけました

今年も全国でコンテストを告知しました。大学敷地内の掲示板や書店のインフォメーションコーナーにポスターやチラシを掲示するなどして、コンテストをアピールしました。また、NRIグループの社員有志が、出身校にメッセージカードを添えてポスターやチラシを送ったり、実際に母校に足を運んだりしながら、学生たちに応募を呼びかけました（詳しくはP92）

金沢大学 大学会館

南山大学
国際教育センター

愛媛大学 国際連携支援部 国際連携課

福岡大学
福岡金文堂（書店） 入口

法政大学 市ヶ谷キャンパス
食堂「フォレストガーデン」入口

北海道大学
札幌キャンパス
中央食堂階段の掲示板

審査

すべての論文に目を通し厳密な基準で評価します

入賞論文を決定するまでには、予備審査、1次審査、2次審査という3つのステップがあります。事務局での予備審査の後、一定の基準をクリアした論文がNRIグループの社員による1次審査に進みます。1次審査で評価が高かった23点の論文が2次審査に進み、2次審査会において入賞論文が確定します。どの審査においても、規定の評価基準に基づいてそれぞれの応募作品を複数の者が評価し、評価の偏りを抑えるようにしています。

募集 2012年6月1日～9月18日 コンテストの告知活動を通じて応募を呼びかけ

予備審査 9月19日～10月25日 事務局で応募論文が審査基準を満たしているか確認

1次審査 10月26日～11月13日 NRIグループの社員が論文を評価し23点の論文が2次審査へ

2次審査 11月16日～11月26日 9名の2次審査委員が論文を評価

2次審査会 11月28日 2次審査委員が集まり入賞論文を選出

入賞論文発表 11月30日 NRIホームページで発表

論文審査の評価基準

テーマと論点の整合性

考察力・分析力
- 論点やテーマ、着眼点の独自性・斬新さ
- 具体例、数値を使用するなど論点のわかりやすさ
- 論点への考察の深さ

提案力
- 提案や解決策の独自性・実現性
- 提案や解決策のスケールの雄大さ、視野の広さ
- 提案内容、主張の明快さ

文章力
- 論文構成のわかりやすさ、文法の正しさ
- 誤字・脱字の少なさ

評価基準以外のプラスアルファ

上記に該当しない点を評価

評価基準以外の尺度で高く評価された論文は、この項目で加点されます。例えば、執筆者の熱い想いや、独自の調査・取材などが評価されます。

論文の要約も審査のポイント

このコンテストでは、応募論文に対し、大学生・留学生は400字程度、高校生は200字程度の要約を課しています。この要約も、審査項目の一つ。2次審査の対象となった論文については、NRIグループの社員が論文の要約を読んで投票を行います。

論文要約投票の評価基準
- 論点やテーマ、着眼点の独自性
- 提案や解決策のスケールの雄大さ
- 視野の広さ

上記の視点から、NRIグループの社員が優れていると考える1作品に投票しました。

論文要約投票の感想

「本当にそう思っているのだろうな、と思われた」

「本質的な部分に焦点を当てていると思えた」

「要約に章立ての概略を記載し、ゴールに向けてのスキームを明確化している点を評価した」

「本文を読んでみたいと思った」

2次審査会

審査委員9名が3時間にわたって議論を展開

9名の審査委員が3時間にわたる議論を重ね、
絞り込まれた23の論文から、
11の入賞作品を決定しました。

審査委員長
椎野 孝雄 理事

若い世代が書いた多くの論文を読んで、明るい希望を持つことができました。高校生の部では、楽しく夢のあるテーマが多く、留学生の部では「こういう考えの人がいるなら近隣諸国との問題もいずれ解決するに違いない」と期待を持ちました。大学生の論文には、未来に向けた挑戦が数多く書かれていました。日本の閉塞感を打ち破るきっかけとなる、将来の社会への希望が感じられる提案ばかりでした。

特別審査委員
池上 彰 さん ジャーナリスト・東京工業大学教授

今年のテーマは、筆者が自ら何をしたいかを問うものでした。そのため自分の経験、可能性を自分の言葉で語っている、バラエティに富んだ論文が多かったと思います。また参考文献にウィキペディアを挙げるようなものはなく、書籍や公的機関が提供しているデータなどを参考にして思考を深めている作品が多かったのが印象的です。どの論文も読んでいて、大いに楽しむことができました。

特別審査委員
最相 葉月 さん ノンフィクションライター

「自分たちの子ども世代」という具体的な対象を挙げてテーマ設定したことから、若い人たちが身近な問題として真摯に考えてくれたと感じます。教育を取り上げた論文が多かったのは、彼ら自身が、今その現場にいるからでしょう。また「閉塞感」「生きる」などの言葉が散見されたことも印象に残りました。個人の想いが強くて論文らしくないものもありましたが、説得力に富む内容だったと思います。

審査委員

三浦 智康

執行役員
総合企画センター長

審査では、次世代に何を残したいのか、そのために本人は何をするのか、読み取れるかどうかを大切にしました。大学生については、論文としての体裁が整っていることも重視しました。今年も活気ある提案が多かったと思います。

審査委員

淀川 高喜

研究理事

大学生の論文は粒がそろっていて、読み応えがありました。それぞれ具体性もあり扱うテーマも面白かったです。一般論ではなく、自分の実体験を踏まえて、これから何をしようとするのかを提案している作品は高く評価しました。

審査委員

中元 秀明

イノベーション開発部

論文全体が論理的にまとまっていて、参考文献を踏まえたうえでオリジナリティのある提案をしている作品を高く評価しました。本人の経験に基づいて強く思ったことから論を展開している論文には、説得力があります。

審査委員

中野 ひなつ

証券ITソリューション
事業本部
NS事業部

高校生の論文は、自分にできることが提案に盛り込まれ、書き手の人となりも見える生き生きした文章かを、留学生・大学生の論文は、自分なりに考えた独自性ある提案かを観点に審査しました。筆者の想いが伝わってくる論文が多く、読み応えがありました。

審査委員

野村 武司

コーポレート
コミュニケーション部長

今年は、本人の気持ちが強く伝わってくるものや、経験に基づいた具体的な提案を含むものなど、非常に読み応えのある論文が数多くあったと思います。そのような書き手の想いが伝わってくる、心に響く論文を高く評価しました。

審査委員

横山 喜一郎

CSR推進室長

今年は本人の想いが強く感じられる論文が多かった印象があります。読んだ人の心を動かすかどうかも、重要なポイントだと考え評価しました。そうした論文は、より多くの人に読んでいただきたいと思います。

論文発表会

NRI社員を前に 入賞者が提案内容をプレゼン

12月21日、東京駅近くにあるNRI本社に
入賞者が集まり、論文発表会が行われました。
NRI代表取締役社長の嶋本正や審査にかかわったNRI社員、
かつての入賞者を前にして、11の論文が発表されました。

論文発表会は、NRI代表取締役社長の嶋本の挨拶から始まりました。嶋本は、東京スカイツリーや昔の姿に修築された東京駅を例に挙げ、「これからの日本を元気にするには、伝統、創造、情熱の3つが重要になる。今年選ばれた論文には、この3つが感じられた」と入賞論文を高く評価しました。

その後、高校生、大学生、留学生が、順に論文内容を発表しました。入賞者たちは、写真や図を上手に使いながら、論文の内容をわかりやすく説明。なかにはプロのアナウンサーのように上手に解説する入賞者や、ウィットを効かせて笑いを誘いながら場を盛り上げる入賞者の姿もありました。

発表会の後は、会場を移して軽食を取りながら、NRI社員や過去のコンテスト入賞者を交えてグループディスカッションが行われました。

NRI代表取締役社長の嶋本正（左上）と入賞者たち

今年は、高校生、留学生、大学生のグループにNRI社員が加わるかたちで、ディスカッションを行いました。以下は、その様子を伝える抜粋です。

高校生

NRI社員―みんなはどうして応募したのですか？
高校生A―学校にコンテストのポスターが貼ってあったのを見たのがきっかけです。
NRI社員―NRIという会社を知っていましたか？
高校生B―知っていました。
NRI社員―高校生で知っているなんて、すごいね。
NRI社員―プレゼンテーションではパワーポイントを上手に使っていましたが、学校の授業でも使っているのですか？
高校生C―実は、この間習ったばかりです。
高校生D―僕は去年の高校生の優秀賞入賞者だけど、去年はパワーポイントを使えなかった。すごいね。

留学生

NRI社員―日本に来てみて、どんなふうに思いましたか？
留学生A―来日する前の印象と、実際の日本は違っていました。それを中国の人たちに伝えたい、国にとって一番いい付き合い方を考えていきたいと思いました。
NRI社員―留学生の皆さんは、なぜ日本と中国、両方の良いところに目を向けてくれたのですか？
留学生B―もちろん両方の悪いところだけを見てしまう人もいます。でも相手を受け入れることが大事です。そうすれば良いところに気がつきます。
NRI社員―日本のどういうところが好きですか？
留学生C―自然や環境、それからサービスの質が好きです。中国の都市部は急速に発展して姿を変え、故郷を失ったという感じがします。日本には昔の自然が残っています。

大学生

NRI社員―医学部医学科の人が入賞したのは今年が初めてなんですよ。
大学生A―医療の現場は忙しくて、社会に向かって意見や情報を発信するルートもあまりありません。でも社会を動かすには、医療現場と社会の間で問題意識の共有が必要だと思います。
NRI社員―出産もそうですが、今年は教育や子育てというテーマが多かった。子どもがキーになって社会を変えることが多いと改めて思いました。
NRI社員―NRI社員へのアンケートでも、子どもがいるほうが幸せと感じる人が多いと結果が出ているんですよ。
NRI社員―グローバルな視点の論文もいいけど、農産物直売所のように身近なところから社会を変えるアイデアも良かったと思います。
大学生B―直売所というと地域や農業が注目されています。そこに子育てという、一見つながらないものを結びつけると、意外な効果が生まれると気づきました。私も論文を書いてみて、本当に実現したいと強く思いました。
NRI社員―政治経済の専門家を育てようという発想はどこから来たのですか？
大学生C―地理や政治経済は重要なはずなのに、大学受験ではあまり有利にはならないのです。そこを疎かにして良い大学に進んだ人が政治家になることに疑問を感じていました。そこが発想の原点です。

表彰式

入賞者の皆さん、おめでとうございます！

論文発表会の翌22日、品川にあるホテルラフォーレ東京において表彰式が開催されました。入賞者の家族、学校関係者も招き、ともに入賞を喜んでいただきました。

授与式では、NRI取締役会長の藤沼彰久が祝辞を述べた後、入賞者が一人ずつ壇上に登り、藤沼より表彰状と副賞を受け取りました。

その後、審査委員長であるNRI理事の椎野孝雄、特別審査委員であるジャーナリスト・東京工業大学教授の池上彰さん、ノンフィクションライターの最相葉月さんから、一つひとつの論文に対し講評が述べられました。

講評が終わると、立食パーティ形式の祝賀会に移りました。祝賀会は、入賞者と池上さんや最相さん、NRI社員、家族や学校関係者が自由に語り合ったり、記念写真を撮ったりと、終始和やかな雰囲気でした。

かしこまった面持ちで表彰状を受け取る入賞者

審査員たちの温かいコメントに真剣に聞き入る入賞者たち

一つひとつの論文に丁寧にコメントを述べる池上さん、最相さん

大学生の部 大賞
山本 泰弘 さん

今回、スーパーソーシャルハイスクールという、自分が正しいと考えるアイデアを論文として発表し、大賞をいただきました。ありがとうございます。しかし論文が発表されただけでは、社会は変わりません。NRIがこのアイデアを実践するトップランナーとなって、うまくビジネスに活用できるようコンサルティングに生かしていただけたら幸いです。また各地の学校が、このアイデアのエッセンスを取り入れて、実践してくれることを期待しています。

留学生の部 大賞
林 猷琼 さん

大賞をいただいたことは夢のようです。また池上さん、最相さん、NRIの方々とお会いできて、光栄に思います。私が論文を書いた目的は、日本、中国に今生きている子どもたち、そして次の世代の子どもたちに、両国を体験した留学生の声を届けたいと思ったことです。だから、この想いが伝わることを第一に考えて文章にしました。今回大賞をいただいたことをきっかけに、私も日本、中国の未来のために、いろいろな挑戦を続けていきたいと思っています。

高校生の部 大賞
木田 夕菜 さん

小学校の自由研究、中学校の調べ学習など、私が今まで取り組んできたことが実ったのが、今回の論文です。私の故郷・鹿児島でも、緑化した市電の軌道敷が増えていますし、隣の熊本でもこの活動が広がっています。これまで都市部といえば、グレイなコンクリートのイメージがありました。これからは緑の多い都市部になってほしいと思います。今回論文執筆を経験し、改めて環境について深く学びたいという思いを強くしました。

「社会人になったら自分のアイデアを実現できるように頑張りたい」

論文についての感想を聞く入賞者

論文に書ききれなかった想いも存分に語り合う入賞者

最相さんからのコメントは気になるもの

会長の藤沼と歓談する留学生の入賞者

「小学生の頃から興味のあるテーマだったんだね」

コンテストへの応募動機

次の社会を担う大人としての自覚と日頃の疑問が、発端

大学生　留学生

日頃、子どもたちとかかわる中で感じる、**大人としての自分の責任について**、自分の考えを見つめ直し、多くの人と意見を交換したいと考えたからです。（大学３年）

分野に縛られず、自分の思いのたけを**存分に主張できる場**を探していました。（大学３年）

日頃から感じている疑問、違和感、使命感、**社会への訴えなどを体系化する**良い機会だと考えました。また、私自身を見つめ直し、人格・アイデア・知見を洗練する機会にもなります。（修士２年）

大学図書館でコンテストを知りました。**私が望む社会の姿を明らか**にしたい、また納得のいく論文を書くためにさまざまな本を読むきっかけにしたいと思いました。（大学２年）

私が日頃感じていることを公の場で発表し、日本という社会の**暮らしにくさや歪んでいるところ**を指摘して、その変革に貢献したいと思ったから。（大学４年）

祖父から**学生生活最後の挑戦**にどうかと勧められ、テーマに関して多少なりとも関心やアイデアがあったので、よい機会だと考えた。（大学４年）

大学４年間の総決算として、自分が学んだことや感じていることを発信したいと考えたから。（大学４年）

日本の将来を考え、また、**自分の専門以外の分野に触れる**よい機会だと思った。（大学４年）

中国の留学生として、尖閣諸島をめぐる**日本と中国の問題を平和的に解決**するにはどうすればよいのかと考えていたところ、ちょうど学校の図書館でコンテストのチラシを見て、論文を書こうと思いました。（大学２年、留学生・中国）

私は、次の世代に何かを残すことが、人間を含むすべての生き物のあるべき姿であり、それが生きる意味だと考えています。**テーマを見て、ぜひ**論文を書きたいと思いました。（大学４年）

このコンテストは、日本が元気を回復するのに役立ち、かつ**同胞の夢の実現に私が貢献できる**貴重な一歩だと思い応募にチャレンジすることにしました。（専修学校専門課程４年、留学生・モンゴル）

この**テーマについて考えていた**からです。次の進路はどのようになるか、社会で自分に何ができるのかという思いがあり、それを何かに書いて知らせたいと思っていました。（日本語学校２年、留学生・ベトナム）

今年、大学生になって、自分が**大人であることを自覚**しはじめ、これから先、私が自分の子ども世代のためにどのように社会を創り上げたらいいのか、考える必要があると思いました。（大学１年）

今回のテーマは、私が**日常生活の中で模索**していたこととても似ていました。私の考えを人に読んでもらい、評価してほしいと思いました。（大学３年、留学生・韓国）

コンテストへの応募動機

夏休みの課題として、また、将来への不安感から

高校生

自分の子供ができた時に、このままでは**今よりも不安の多い社会になっている**と思うので、自分たち世代が社会を担うためにするべきことを考える良い機会になると思ったから。（高校1年）

自分が**いつも不思議に思っていること**を聞いてもらえるいい機会だと思ったから。（高校2年）

自分自身が悩み続けていたことと向き合う機会になると思いました。**言葉には伝える大きな力がある**と思っています。その力を借りて、私が悩みながら出した答えを皆さんに知ってもらえればうれしいと思い応募しました。（高校1年）

昨年も応募したので、**今年も挑戦**してみようと思いました。（高校2年）

自分がぼんやりと考えていたことを**明確にしたかった**から。（高校3年）

今は、昔よりとても物騒だし、いじめなど、マイナスなニュースが多いと思います。このままでは、**大変な世の中**になっていきそうで**とても心配**しています。そこで、私の考えを伝えたいと思いました。（高校2年）

要項を見て、これならば**自分にもできる**かもしれないと思った。（高校1年）

私は自分が興味ある社会科学系の分野で、**自分の意見を練って**発信する力を磨きたいと思っていました。NRIのコンテストでは、そのような力を試せると同時に、自分が日頃抱いている意見や考え方を表明する一つの機会になると思いました。（高校1年）

本コンテストに応募したのは、私自身、**将来に対する不安**があるからです。将来の社会の安定のためにはどうしたら良いのかを一度深く考察し、まとめたいと考えました。（高校2年）

野村総合研究所という名前を聞いたことがあり、また過去の開催実績をみて**興味を持った**から。（高校1年）

夏休みの選択課題の一つでしたが、今の**自分が未来の社会のために**何ができるのかを見つめ直す良いきっかけになると思ったからです。（高校1年）

正直、**今の日本に誇りを持てていなかった**ので、日本を活性化し将来の子供たちにはもっと誇りを持ってほしいと思ったから。（高校3年）

将来、私は政治家になるという志を持っており、夏期休暇を利用して小論文を執筆することを通じ、自身の思想や姿勢、将来設計を確立したいと考えていた。また、東日本大震災以降の政治や報道、それらに煽動される社会情勢に強い危機感を抱いており、学生という将来世代の立場から**警鐘を鳴らす機会を得たい**と切望していた。（高校2年）

最初は学校の宿題として出されたから応募したが、調べていくうちに**最近の世界や日本の事情を知ることができ**てためになったのでこれからもこのような小論文コンテストがあったら応募したい。（高校3年）

NRI社員による審査の感想

論文の社内審査を行った NRI社員のコメント

大学生

どの論文も「あるべき社会」への考察が大変素晴らしく、甲乙を付けることが非常に困難だった。（システムエンジニア／男性）

お世辞抜きで、今年の論文はいずれもハイレベルだったと思います。驚きの一言です。（コンサルタント／男性）

（論文をまとめることによる）このような思考の機会が、当社のイベントによって生み出されていることは、すばらしいことだと思う。高評価の論文が、多くの人の目にとまるよう、期待している。（コンサルタント／女性）

今の大学生や高校生が社会に対して何をどの程度考えているのかを知りたいと思い小論文審査に参加しました。多くの筆者が、自分なりの着眼点や問題意識を持ち、具体的に活動していたり解決策を考えていたりすることが感じられ、刺激を受けました。（システムエンジニア／男性）

よくできた論文とそうでない論文の差が大きい印象がある。また、よくできているものは、正直、私を含め周囲の当社社員の考えよりもしっかりしているのではないかと思った。（スタッフ／男性）

留学生

どの論文も着眼点に個性があり、とても面白かったです。ただ、やはりまだ考察や分析が不足しているため、説得力の弱い論文もあると感じました。（マネージャー／男性）

日本の学生に比べて「意見が純粋である」と感じました。また、留学生は日本を客観的に見ているので、日本人としてハッと気づかされることがたくさんありました。読んでいて私自身の勉強になりました。（コンサルタント／男性）

全体的にみなさんよく考えていらっしゃって甲乙つけがたい論文でした。（システムエンジニア／女性）

学生たちの感性に触れ、新しい視点からの考えは、とても楽しいものでした。来年度もまた審査に参加したいと思いました。（システムエンジニア／男性）

高校生

素晴らしい論文に出合うことができた。読んでいて、ちょっと楽しくなった。（システムエンジニア／男性）

初めて高校生の小論文を審査したが非常によい経験となった。全国の高校生が考えている未来を知ることができ、20代の自身が社会にどう貢献するか改めて考える機会になった。（システムエンジニア／男性）

若い世代の方々が「これからの日本はどうあるべきか？」「自分は何をすべきか？」ということを真剣に考えているのだと実感しました。「社会への提案」という観点よりも「自分として特にやりたいことは何か」という観点が重視されている今回のテーマは、高校生の小論文コンテストとして、とてもよかったと思います。（スタッフ／男性）

学校や机上での学習だけでなくインターンやボランティアなどの課外活動を通じて、社会と深く触れ合い、さまざまな経験をしている学生ほど、深い考察や熱意のある提案ができているように感じました。これからも自分なりに考えて行動し、将来の夢や理想の未来の実現に向けてまっすぐに進んで欲しいと思います。（システムエンジニア／男性）

論文なのに、「～と思う」といった主観的な記述の多い作品が目立った。その半面、データや事例を挙げて論証しようとする迫力ある文章から、個人的な想いが伝わってくるものもあった。（コンサルタント／男性）

参加者の中での差の大きさを感じました。ネットで得た情報やなんとなく考えた情報ではなく、実際に経験することや実感することが大切なのだと改めて感じました。自分自身もいろいろと経験をして、社会について真剣に考えなくてはと考えさせられました。（スタッフ／女性）

社会平和や平等に対する強い思いを持ち、それを論じている方が多かったことに驚きました。論文らしくない作文のような文章が多いと感じましたが、強い思いが伝わってきました。（システムエンジニア／男性）

NRI社員のコンテスト告知活動

皆さんの高校・大学を NRI社内応援団が訪問

コンテストの告知活動は
NRIグループの社員有志が地道に行っています。
母校やゆかりのある学校に、
ポスターやチラシと一緒に
メッセージカードを送ったり、
実際に訪問したりしながら
学生に応募を呼びかけました。

宇都宮大学

幸若 栄毅（産業システム事業四部）

母校の教授と学生にコンテストを説明

母校の工学部と農学部を訪問し、「NRI学生小論文コンテスト2012」に関して教授と学生に説明してきました。コンテストについては、プロジェクターを用いた会社説明の中で触れ、募集をお願いしました。夏休み期間中でもあったので、集まった学生は8名程度でしたが、NRIという会社に興味のある学生らと積極的な質疑応答のやりとりができました。

学生たちに、NRIとコンテストを説明

広島県立安古市高等学校

小室 一彦（STAR事業管理部）

今年も学生たちに応募を呼びかけ

母校の2年生の生徒全員（317名）に、キャリア教育の一単元「未来のシナリオづくり」の中で、コンテストへの応募を呼びかけました。社内応援団としての訪問は、今年が4回目になります。社会人生活やNRIの事業について説明を行い、応募要項を案内しました。今年は先生方から「2年生を対象に小論文を書かせて応募させます」と心強い回答をいただき、うれしく思っています。

体育館で2年生にコンテストを紹介

宮崎日本大学高等学校

若友 千穂

（コンサルティング事業本部グローバル人材開発室）

クラスでコンテストを紹介

先生方には「NRI学生小論文コンテストに応募することは、東京の風を感じることができ、生徒にとってたいへん刺激になる」と喜んでいただきました。また「理系大学志望の学生たちがNRIに対して憧れを抱いている」というお話を先生からうかがうこともでき、私自身にとっても励みになりました。

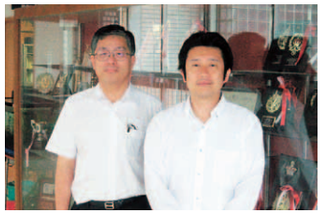
教室で生徒を前にコンテストをアピール

宮城県仙台第三高等学校

土門 和幸（保険システム五部）

昨年の大賞受賞者在籍校を訪問

2011年コンテストで大賞受賞者の出た母校を訪問し、教頭先生に会ってきました。教頭先生からは、「日本の金融基盤を支える会社に卒業生が在籍していることを誇りに思う。今年も夏休みの宿題の中から小論文コンテストの趣旨に合うものがあればピックアップして応募させていただく」旨のお申し出をいただきました。



今年のコンテスト応募をお願いしました。
左が教頭先生

教員から見た「NRI学生小論文コンテスト」

神奈川県立中央農業高等学校
（今年の優秀賞受賞者の在籍校）

髙橋 晋太郎 教諭

当校は農業高校なので、生徒が小論文を書く機会はなかなかありません。一方、生徒たちのなかには、所属する部活動のなかで意欲的に自分の研究課題に取り組んでいる者がいます。自分の取り組みや成果を文章にしてまとめ、人から評価してもらうのはとても大切なことだと思います。「NRI学生小論文コンテスト」は、その貴重な機会になると改めて思いました。来年から、生徒に呼びかけて応募を促そうと思っています。

頌栄女子学院高等学校
（今年の優秀賞受賞者の在籍校）

田中 克己 教諭

「NRI学生小論文コンテスト」は、当校の生徒が今回入賞したことで初めて知りました。表彰式に参加させていただきましたが、NRIの方々や、特別審査委員の池上さん、最相さんは応募論文一つひとつをきめ細かく読んでくださっており、審査のプロセスがたいへん丁寧であることがよくわかりました。このコンテストは、生徒にとって文章を書く良い機会になると思います。来年のコンテストには生徒に応募させたいと考えています。

おわりに

今回のコンテストには、
過去最多となる1,390名の学生の皆さんから、ご応募をいただきました。
今回の応募作の特徴として、
「これからすべきこと」に思い至った経緯や熱意は伝わるものの
体験記あるいは感想文になってしまっている作品が多く見受けられました。
本書で紹介している評価基準や審査委員のコメントなどをヒントに
工夫をすれば、もっと良い小論文が書けるようになると思います。
参考にしてみてください。

また、過去最多の応募をいただけたのは、
募集の告知にご協力くださった、多くの学校や先生方のおかげです。
この場を借りて、心より御礼申し上げます。
このコンテストが、学生の皆さん、ひいては
日本や世界のよりよい未来につながるところがあれば幸いです。

2013年2月

「NRI学生小論文コンテスト2012」事務局

メディアでの掲載

NRI学生小論文コンテストは、毎年、さまざまなメディアに取り上げられています。
その一部を、紹介いたします。

「上毛新聞」2012年12月20日付朝刊

「オルタナS」
http://alternas.jp/

「月刊留学生」2013年1月号　（注）写真は2011年の入賞者

「高校生新聞」2013年3月1日号（第204号）

NRI学生小論文コンテスト2012
日本から未来を提案しよう！

野村総合研究所　コーポレートコミュニケーション部　CSR推進室
発行：2013年3月
Copyright©2013 Nomura Research Institute, Ltd. All Rights Reserved.

株式会社 野村総合研究所

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-6-5 丸の内北口ビル
Tel.03-5533-2111
http://www.nri.co.jp